



2012. May  
第 8 号

日本演出者協会 協会誌「ディー」

題字 千田是也

新劇の代表的演出家・千田是也氏の文字をロゴデザインに使用。  
(資料提供/早稲田大学坪内博士記念演劇博物館)

特別対談『演出は五線譜の上に。』

松本重孝 × 山田和也

## Contents ■■

- |                                |                      |
|--------------------------------|----------------------|
| ■特別対談 山田和也×松本重孝「演出は五線譜の上に。」……2 | ■演出家・俳優養成セミナー 盛岡……16 |
| ■若手演出家コンクール……5                 | ■理事会報告……16 ■事業担当……16 |
| ■フェニックス・プロジェクト……8              | ■各地域活動……17           |
| ■日韓演劇フェスティバル……9                | ■アンケート……18 ■新入会員……18 |
| ■国際演劇交流セミナー ポーランド・中国……12       | ■部会だより……19 ■退会……19   |
| ■日本の近代戯曲研修セミナー 東海・札幌・東京……13    | ■データで見る……20          |
| ■演出家・俳優養成セミナー 福島郡山・千葉……14      | ■ホームページ報告……20        |
| ■演出家・俳優養成セミナー 旭川・はつかいち……15     | ■編集後記……20            |

日本演出者協会誌「D」(ディー) 第8号 定価=無料 2012年5月1日発行 平成20年11月創刊(毎年2回発行)

【発行人】和田喜夫(理事長) 【編集人】篠崎光正(広報部長) 【編集委員】篠本賢一/三谷麻里子/小川功治朗/大杉良 【インタビュー編集】鷺谷憲樹  
【発行所】日本演出者協会 東京都新宿区西新宿6丁目12番30号芸能花伝舎3F(〒160-0023) 電話 03-5909-3074  
【編集・制作】日本演出者協会広報部協会誌「D」編集委員会 【題字】千田是也「Marionetto」より 【印刷所】有限会社一光堂印刷  
【表紙デザイン】前嶋のの 【本文デザイン】奥秋圭

# 演出は五線譜の上に。



文章・構成：藤谷憲樹 / 写真：岡本陸史

オペラとミュージカル。ともに音楽劇である。  
音楽を扱う演出家同士の対談では、  
おおきな喜びと独特の苦勞が語られた。

## 「音楽劇」の演出家が考える 音楽と演出の関係

**松本** ■僕の場合はほとんど、というか100%オペラしかやっていないんで。いま僕がつきあっている舞台は音楽が先にあつてというのが当然なので、あらためて「音楽と演出について」を考えたことがないというか。演出そのものが音楽なんだっていうふうになっちゃってるんで。

——楽譜に演出が書いてあるじゃないかと

**松本** ■そうなんです。つまり僕の方から言うと、台本というのはテキストじゃなくて五線譜なもんだから、作曲家が台本作家からもらった台本を音にする段階で演出をはじめているわけですよ。僕たちの仕事って、あらためて演出を起こすんじゃないかって、作曲家が第一演出家として書いてあることをできるだけ曲げないで、ストレートに読み取る作業。

**山田** ■僕のところは依頼が来るものはほとんど海外で一度上演されたものなんです。場合によっては海外でまだ続演中だったりして、それを観に行くこともできた

りして、あるいは日本の観客のみならず、僕らよりも情報を熟知されていて、実際に観に行かれてたり、インターネット上にあらゆる情報や資料が溢れてたりして、すぐ比べられるんですよ。演出の著作権は日本には無いんですけど、真似をしないために観に行くってことがあるんです。でも、与えられている台本とスコアは一緒。それを考える相談の余地はあるんですけど。ある上演を想定して書かれた譜面と台本がある。上演をしながら練りこまれて手直しをされている。そこには、舞台転換のことであったり照明の変化であったり、ステージングや振り付けのことが織り込まれたスコアがあるわけです。そういう意味では、さっきおっしゃられたのと同じような意味で、すでに演出されている譜面なんです。

**松本** ■劇場の条件でここにこれだけ音が入っちゃうとかどうしてもここでダンスを出さないといけないとか。

**山田** ■あるいは、ここで盛り上がるのはなんのためなのか、このアレンジが複雑になっているのは何が行われているのか。当然そこになにか起こっているだろうと。

## 音楽と演出 対談：松本重孝 × 山田和也

**松本** ■もしかしたら舞台美術を縦横無尽に使うために現場で書き直してるとも、たぶんあるんですね。それが定着してこつちに来ちゃってる。

**山田** ■そうですね。とくに現代のミュージカルは、舞台上で起こっているテクニカルなことや視覚的な要素と音楽が一致するようにアレンジされているものが多いんで、それを読み取る必要があると思うんですね。聴き取るというか。ここは絶対、音がなにかやれと言っているんだと。それをどう解釈してなにに置き換えるかってことをいまは考えますね。もちろん上演が観られないものや資料が与えられないものもありますから、そういう時は当然、音とテキストから紐解いていくとすることが必要になってきて、そのときに、作曲家と劇作家がなにをやるうとしたのか、なにを観客に届けたかったのかを想像して、できることならばその作家たちが思い描いていたところへ辿り着きたいと思っっているんです。とくにまた今の時代だと、オリジナルの作家たちがいとも簡単に観に来て、初日に挨拶したりなんかするので（笑）。そうすると、僕らが好き勝手すればいいやつのもなんか心苦しくて。もちろん一義的には日本の観客たちを喜ばせて楽しませて感動させるために手を変え品を変えやるんですけども、同時に、はるばる観に来てくださる生みの親たちを喜ばせたいって思いもすごく強いんですよ。その、二律背反しかねないところを両方追っかけることを、まずは考えてますね。

——オペラの場合にはまたちょっと複雑じゃないですか。たとえば、先輩がやっていて、過去が亡霊のように出てくるところもあるでしょう。

**松本** ■まあ、ありますけれども。作品の年齢、つまりもう200年前の作品とかね、作曲家が現存しているものがほとんど無くて。なんというか、古典芸能。前にやった演出家のものと似て当たり前なわけです。あまり考え過ぎるとかえって変なところに行っちゃいますんで。

# 「まじか」って思うようなことを 音楽がぐーっと持つてつてくれる。

【松本重孝】

オーソドックスに作られたものならそれを踏襲しちゃっていいんじゃないか。それよりは、見た目が似ていようと作品やキャラクターの解釈あるいはドラマをもっと深めていくというか。たとえば『蝶々夫人』。これ、和服を着てやるに決まっているじゃないですか。先輩がやってたからって、じゃあチマチヨゴリにしよう、ベトナムのアオザイを着せちゃおうって、じゃあ何が変わるのか。先輩たちは、解釈の仕方とかキャラクターの作りやドラマの深みで変わってくればいいって僕は考えているので。

## 音楽を扱う楽しみ 音楽の力を信じる演出

**山田**■純粹に、クリエイターとして、演出家としてどう接するかって考えると、音楽をどう使うかってすごくワクワクするものがあるんで。理屈とは違うものがあるじゃないですか、音楽って。歓びとか、観客の心をダイレクトに動かすとか記憶を呼び覚ますとかね。そういうものってどう向き合うか。言葉や論理とは違う何かをそこに見つける。

**松本**■ストレートプレイだと「そんなことあり得ない」って思うようなことが、音楽が介入することで納得できるようなになる。まさかかって思うようなことを音楽がぐーっと持つてつてくれる。オペラもそうですけど、たった一日の出来事ですってみんなが納得できちゃう。そんなことあるわけない話なのに。その音楽の強さ。楽譜に書き込まれた、ものの本質を伝えようとする、ストーリーを伝えようってんじゃないやなくて、人間関係の本質のなにかを音でぐわーんと持つていく強さ。そういうのが見えてくると劇をとて音楽に見せていける。ストーリー的には変

なものでも、すぐには納得し難いものでも、音楽の上に乗っかってあげるとみんなが「そうだよな」ってわかっちゃう。

**山田**■音楽のいちばん強い利点は観客を感情移入させるってことなんですけど。その人物が観客の琴線を震わせる楽曲を一曲持つていけばそれでも感情移入させることができる。音楽を利用してストーリーを運ぶ、プロットを進めていく。優れたミュージカルはそのプロットポイントにその効果を観客に与えるナンバーがちゃんとそろってるんですね。その通りに効果を發揮させていけばおっしゃるように楽に演出できるんですよ。情緒的に音楽を聴いて演出してしまうとかえって危険で。プロットが見えなくなる。その音楽はそういうふうに機能させちゃダメなんだよってことが起こりますよ。読み込みの浅い歌い手が感情を込めすぎて歌ってしまうとか、演出家が全体の構成を考えずにその楽曲だけを盛り上げてしまうとかえってストーリーが見えなくなる。優れた音楽はちゃんとそれが劇的に立つてくるように作られて、それさえ見つけられなくてもする必要が無いってことがありますよね。逆に言うと、その音楽の盛り上がりや華やかさに負けないように演者たちをどうコントロールするか、舞台美術や照明を違和感ないようにどうそろえるか、ステージングや振り付けをどう作るかが難しいってことになりまますけど。たとえば台詞を情緒たっぷりにやってたらもうナンバー要らないじゃんっていう。ナンバーを引き出すために台詞があるんだと。

**松本**■そうそう。会話のところでもストーリーが展開していて、ナンバーのところでもメンタルというか何を本当は考えてるのか、人間関係とか、ホントはこの人が一番

## 音楽と演出 対談：松本重孝 × 山田和也

悩んでいるんだってのが、音楽で見えてくる。

**山田**■でも俳優って演じたがるので、ひとつひとつのことを目一杯最大級にやろうとする。音楽のセンチメンタルと相乗効果で……、最悪のことになりますよね。

**松本**■音楽入ってきた時の効果が低くなっちゃう。音楽でぼつと色をつけようと思ってるの。レチタティヴオはおたまじゃくしで書いてはあるんだけど、そこで歌ってたら音楽が来たときのカタルスシがないじゃないかと。やつと音楽が始まったってのに、その前から歌うようにしゃべってたら。

**山田**■音楽つてすごく力があることなんで、それを活かすも殺すも、どう音楽に渡すかっていう。

**松本**■そこに行くまでの前の準備がうまくいってれば、あとは作曲家に任せちゃえばスツとドラマが見えてくる。



**松本重孝 (まつもと しげお)** 東京都出身。69年よりオペラの現場で栗山昌良、佐渡川藤信らの演出助手を務め、84/85年に渡伊。87年に台北で「リゴレット」を演出。その後国内各地で演出。02年にミラノ、ストレーラー劇場で「蝶々夫人」を演出。現在に至る。

——音楽を使うと、大きな空間でもいろいろ表現できるじゃないですか。

**松本**■オペラの場合はアコースティックじゃないといけないので、いちばんは、音響空間としていい空間ができるかどうかです。反響板になるものを道具で作ってしまう。できるだけ、広い空間にしないで狭くする。すると人間関係が緻密に見える。それと歌い手さんって酸素をたくさん使うから、歩く距離って限度があるんですよ。僕が経験上わかったのは、間口6間以上のところだと歌えないです。3間を歌いながら動くのたいへんですよ。役者さんだったら走ってしゃべるのは可能ですけど。



## 純粹に考えると、音楽をどう使うかって すごくワクワクするものがある

「山田和也」

ミュージカルはマイクがあるので踊ったりもあれですが、実効間口を6間に狭く抑えていく。すると2、3歩歩いただけでもドラマが生まれるんですね。人の関係がすごく近くなったりとか、前やうしろに動くことで人間関係が見える。ほんと、1歩の動きで人間関係のドラマを見ることができる。歌い手さんって、僕らにとっちゃ役者じゃなくて楽器なのよね。だから、楽器の性能がいちばんいい状態で舞台上に立たせておかないと。

**山田** ■ミュージカルに関して言うと、歌い手さんを楽器として扱う必要がないぶん、音楽のダイナミズムと空間の視覚的要素をどうマッチさせるのかがすごく重要になってくる気がしますよね。サウンドがデジタル化されてからものすごくダイナミックにPAできるようなって来たんですけど、それに視覚情報がついていかないとミスマッチな気がするんですね。音楽だけが突出して視覚的なものが足りてない気が、観客にしてしまいう。空間をどう変化させていくか。つまり時間軸ですよね。舞台美術に時間軸が入ってきた。舞台美術家も照明家も、空間を構成する能力に時間軸、つまり音楽を理解してそれを照明にどう置き換えるか、舞台の空間に置き換えるかっていう能力を持った人が重要になってきたということだと思っんですね。

**松本** ■音楽として表現することがオペラとしていけば大切なので、音楽を聴くのに邪魔にならないこと。視覚的に動かすと、音が聴こえなくなるんですね。



**山田和也 (やまだかずや)** 日本大学芸術学部演劇学科卒業。卒業後は東宝演劇部に所属、ミュージカルを中心に、大小様々な劇場で演出している。「ジキル&ハイド」他の演出で第28回菊田一夫演劇賞を、「ラ・カージュ・オ・フォーレ」他の演出で第12回千田是也賞を受賞。

ね。視覚のほうが勝ってるから。照明がパンって変わると「えっ？」って、鳴ってる音が聴こえなくなっちゃう。ビジュアル的なことが、実は使えないんですね。究極、理想は、音楽の力に乗ってお客さんの想像力で舞台を作っちゃう。僕は、部屋の中の場面なんかだとけっこう壁を取っ払っちゃう。出入口はここです、ここが壁で扉はここで、ここを越えたらこの人はこの人を見えないんだよってことを設定してあげたら、お客さんの想像力の中に豪華な部屋が見えている。シャンデリアひとつぶら下げるだけであとはなんにも飾らないとかね。ていうふうにしていくと、音楽の力によってドラマが見えてくる。できるだけ音楽を邪魔しない(笑)。

### 歌と音楽の表現力 観客の想像力を利用する

——若い観客は、言葉で想像させようとしても、そのものをワツと見せないで伝わらない感じがありませんか。

**松本** ■僕なんかラジオで育った世代なので赤胴鈴之助がいまこうしたとか、勝手に映像を作っているわけですよ。そんな中で育ってきちゃったからかもしれないですけど。

**山田** ■観客が感情移入するのは当たり前だと思っただけですけど、いまの20代30代の人たちはそうじゃないんですね。テレビで、しゃべってる人の言葉をわざわざテロップにして出すようなことに慣れてしまっていて。劇場ってそういうとこじゃなくて、暗闇に座って、舞台で起こっていることを自分の中で想像力で、こっちから気持ち乗っ出して行って、観る。それは放つといつも起こることだったはずなのに、起こらなくなり始めている。つまり来てくれるものを好む、楽に視聴したくなる。想像力

を働かせたくない、めんどくさいから。劇場にとっては恐ろしいことですよ。逆に言うと、ミュージカルは「来てくれる」のでこの十年伸びてきたのかも。若い観客にとつては楽ちんだってことがあると思っんですね。

——ミュージカルは歌があるじゃないですか。芝居は、台詞では絶対にホントのことを言わないんですよ。ミュージカルは、歌で本音を言う。「あの役の人はこういう気持ちなんだ」とわかる。

**松本** ■台詞でこう言ってるけど、ホントはこう思ってる。台詞の裏を読んでいくとか、しないんだ。

**山田** ■しかも日本語のミュージカルって言葉数が少なくなっていてわかりやすい日本語をはめてあるから、なおさらですよ。

**松本** ■向こうの言葉だとドピオ・センソというか二重の意味を持たせてるじゃないですか、ひとつの言葉で。裏の意味がある。そういうことは日本語では伝わらないですもんね。

**山田** ■ミュージカルの心情ってものすごい振幅がありますものね。それに演じ手がどう答えられるかってのはありますね。その振幅には生半可なエネルギーじゃ太刀打ちできないですよ。

◆ ◆ ◆  
おふたりの対談は、欧米で專業化が進むミュージカルスタツフや産業としての舞台芸術、オペラとミュージカルの発声法の違い、日本語で音楽劇は可能なのか、など興味深い話題を多く含むものとなった。

残念ながらここでは割愛せざるを得なかったのだが、舞台芸術に関わるものとして真剣に考えなくてはならない重要な課題ばかりであった。

音楽と演出 対談：松本重孝 × 山田和也



# 若手演出家コンクール2011 最優秀賞決定

2012年3月7日(水)〜11日(日) 下北沢「劇」小劇場にて、若手演出家コンクール最優秀賞を決する審査上演が行われた。第1次審査応募81名、第2次審査15名を経て、優秀賞に選ばれたのは4名。最終日の公開審査会にて、平塚直隆が最優秀賞に決定。全作品を観劇した観客の投票数で決まる観客賞は村井雄が受賞した。

## 最優秀賞 平塚直隆 (オイスターズ)

作品名 『日本語私辞典』 (作 平塚直隆)

### ◆最優秀賞のお気持ちを聞かせてください。

今年の目標は長久手市文化の家で行われる「劇王9」で劇王になる事と、演出家コンクールで最優秀を獲得する事でした。年末に東京とあるパワースポットに行きまして、そこで願掛けの「おもかる石」を持ち上げたところ、めっちゃくちゃ重くて、流石に二つは無理かと諦めていたので、二月に劇王になった時、これで演出家コンクールの方は終わったと思っていました。僕を推して下さった審査員の方々に感謝して、推して下さらなかった審査員の方々にもやはり感謝して、これからも精進していきたいです。

### ◆受賞を一番誰に伝えたかったですか？

受賞の瞬間、劇団員は目の前に居たのですが、主宰の中尾達也は名古屋におりました。たった一人で道具を作ってくれていたの彼に感謝です。

### ◆今後何が変わると思いますか？

僕はもっと自覚を持たないといけないと思いますし、周囲からの目も変わって欲しいと思います。とりあえず、詰めが甘いところを直します。

### ◆選ばれた決め手はなんだと思いますか？

必死に作っていったので自分ではよくわからないんですけど、強いと言えば、伊勢と京都で買った芸事のお守りでしょうか。

### ◆演劇、演出を始めたきっかけ

大学時代、劇団に入っている友人の話を聞いていううちに興味を持ちました。映画シナリオを勉強していた時、北村想さんの戯曲にハマり、想さんが名古屋にいらっしゃるならとプロジェクト・ナビに入団しました。僕が本を書いている事を知って、本公演の作・演出をやらせて頂きました。プロジェクト・ナビにとって想さん以外では初の作・演出でしたし、しかもこんな新人に、憧れの役者さん達に出て貰ってその時に覚悟を決めたのです。何がなんでも続けて行こう、じゃないと意味が無い、と。

### ◆応募動機

前回も出させて頂きまして、一票差で金さんに負けたので今年は雪辱に燃えて応募しました。このコンクールを知ったのは二年前、名古屋の友人、鹿目由紀が優秀賞になったからです。それと同じように僕が最優秀になった事で、名古屋の若手演劇人もこぞって応募されることを期待します。僕でも獲れたんだからきっとこの賞が近く感じられると思います。

### ◆今回の作品の見どころ、苦労した点

文字が消えていく事を「物」で作ったかったので、稽古の度に紙を貼り直さなきゃいけないのが大変でした。映像では絶対にダメで、切られた文字がハラハラと落ちていき、それが床にたまる、消えた



文字を踏みつけて演技をする。しかしそのイメージを最後まで引っ張ったのはよくなかったと、なにしろきれいにまとめようとしてはいけないなど、審査会を聞いていて思いました。消えていく現象その過程を描いたのですが「だからどうなの？」と思われるという事は、その描き方が不十分だったと認めざるを得ません。

### ◆今後の展望

オイスターズは年に二回の公演を定期的に行っております。最近になってようやく動員数も増えて来ましたが、まだまだ「名古屋でありお客さんが入らない劇団」の域を出ておりません。もっとたくさんの人に観てもらいたいし、地方でもこうして頑張っている劇団がたくさんあるのです。東京に公演をしにくいのではなく、お客さんが地方に観に来る、それくらいになれるといいんですけど。

### ◆日本演出者協会に望むこと

こうして賞を頂いて、夏には中津川の歌舞伎小屋でも上演させて頂きました。僕にとってはありがたいこと尽くめで何を言ったらいいのか難しいのですが、協会には人と人の繋がりの大切さ、大きさを教えて頂きましたので、これからは僕に出来る事があればなんでもやらせて頂きたいとは思っておりますが、あまり余計な事を言うとは「じゃあやれ」と流山見さんに言われるのが目に見えているので黙ります。

### ◆最後に一言

若手演出家コンクール最優秀賞の名に恥じないように、これからも続けていきたいと思っております。オイスターズを、平塚を、どうぞよろしくお願いたします！

## 平塚直隆



劇作家 演出家 俳優。オイスターズ所属。昭和48年名古屋生まれ、在住。全国各地の戯曲賞で5本の佳作を受賞し、「佳作の男」と呼ばれていたが、2009年第四回仙台劇のまち戯曲賞大賞、続く2010年に第16回劇作家協会新人戯曲賞最優秀賞、若手演出家コンクール2010最優秀賞を受賞し、完全脱出。

優秀賞 かしわぎとしひ  
柏木俊彦 (第0楽章)

作品名「あくびと風の威力〜3600秒 ver.〜」

演劇、演出を始めたきっかけ―役者を始めたのは大学生の頃でした。モラトリアム期間を持って余し自転車でも日本を巡るも満足せず、思えば何か熱中するようなのも欲しかった気がします。30歳を境に1年間の会社員生活を送るも、再燃し退職。演出も役者も常に若手で臨んでいます。

応募動機―振付をしてきているスズキ拓朗さんの影響があったと思います。何事にもチャレンジしている姿が素敵で応募した覚えがあります。自分の今を知る試みのひとつだとも感じています。コンクールについてはチラシなどで拝見したことがありました。

今回の作品の見どころ、苦労した点―見どころについては、役者が粒立ち活き活きと舞台上立つ姿だと思います。苦労した点では、今公演に割く時間が十分に取れなかった事がひとつ大きくあります。反省にもつながりますが、1時間の公演に編集しなおす際に、演出と俳優、舞台と観客、これらの関係性を探る時間が殆どなかった、悔やんでいる点です。

今後の展望―5月中旬より1か月半滞在して現地の俳優と京都舞台芸術協会プロデュースに挑みます。今後、横浜や京都以外でも活動・交流をしていきたいと思っています。そしてこの活動が日本の外にも広がっていくことが希望です。

協会に望むこと―コンクールに携わってみて、協会の概要や活動が分かってきました。演劇人にとって、もっと身近に感じられる存在になれば良いと感じております。



柏木俊彦―俳優・演出家、木野花ドラマスタジオ出身。第0楽章にて演出を行う。主な演出作品に、『あくびと風の威力』(作角ひろみ、2010年)など。同作品は、横浜S.A.C『再演支援プロジェクト』リバイバルチャレンジ#5に選出。2012年度京都舞台芸術協会プロデュース公演『建築家M』の演出にも選出されている。



優秀賞 たかくら  
スズキ拓朗 (ダンス集団 Oratio P.U.R.N. 劇団 tamago P.U.R.N.)

作品名「さいあい〜シエイクスピア・レシビ〜」

演劇、演出を始めたきっかけ―保育士を目指す高校時代、地元でやっていた教育演劇を観劇しシエが外れ、桐朋学園に入学したが演劇を始めたきっかけです。その後舞台上でのムーブメントに興味を持ち、コンテンポラリーダンスを独学し今にいたります。卒業後、同じ駅に住むパフォーマンス集団「たまご」で意気投合し、山川劇場演劇コンクールに応募。無謀にも水木しげる作「空想石」を脚色演出することになりました。

今回の作品の見どころ、苦労した点―人間にもしがあるとしたら、愛する為にあるのです。シエイクスピアはそれを描きました。by小田島雄志。この言葉に感動し、作品にしました。シエイクスピア作品をおもしろく短時間で！心を持たない野菜

が彼の作品に関わることによって心を見、役者自身も体験し、それは魅力へとつながりました。数々のムーブメントはターゲット性たぶりの時間を提供できたかと思えます。ダンサーの僕がシエイクスピアを何度も読み返すのが大変であり奇跡的でした。

今後の展望―もっと多くの方にシエイクスピアを知っていただきたいです。そのため来年単独公演を予定しています。新作も今創作中であります。もともと身体だけで成立できる繊細な動きの開拓や、それに似合う精神力も養っていかたいと思います。今回舞台監督がいなかったりと、劇場スタッフの方々には心配かけしてしまいましたので、そういったスタッフワークも怠らないよう努めていきたいです。まずは来年演出家コンクール2013リーベンジでしょうか！

協会に望むこと―演劇人同士の繋がりを広げていきたいです。なによりも繋がりがそこが大切であり、それは演劇に限ったことではありません。お互いに刺激しあひながら、こうしてどんどん輪を広げていくことが必要だと僕は思います。イベントや演劇祭など、演出者協会全体で、出逢える場、語れる場、発見する場作り出す場が大きくなっていくらなと思います。具体的意見でなくすみません。後、劇中のムーブメントや振付ならお任せください。使ってください。



スズキ拓朗―振付家・ダンサー。ダンス集団 Oratio P.U.R.N. 劇団 tamago P.U.R.N. 結成 & 主宰。横浜 DANCE COLLECTION EX を始めさまざまな賞を受賞。コンドルズ新人ダンサーとして全国を巡る。Guangdong Festival 16MASDANZA CONTACT2011 などコンロ作品でも海外進出。桐朋学園芸術短大終了。



優秀賞・観客賞 むらいゆう  
村井雄 (開幕ベナントレース)

作品名「アントンとチェーホフの桜の園」

【若手演出家コンクール2011バージョン】

演劇を始めたきっかけ―公務員をしていた当時、知人に巻き込まれる形で演劇の世界に足を踏み入れてしまいました。俳優として可能性を探る中で、作品世界の全体を創り上げることに興味を持つようになり、自ら構成・演出を手掛けるという試みを続けています。

応募動機―知人の強い勧めがあり、「自分を若手と考える」という応募資格に興味を持ち、自分を含めた「若手演出家」たちの作品を審査員がどのように観るのか興味を持ち、応募致しました。

今回の作品の見どころ、苦労した点―多角的な構成作品です。見どころの判断は本番の舞台を観たお客様に委ねたいと思います。コンクールの10日後に控えた「アントンとチェーホフの桜の園」最終章として、伝説へ! (会場:アサヒ・アートスクエア)との会場規模の違いによる、それぞれの目的を持った構成演出・演技・製作すべての演劇的作業を同時進行させていく必要性を抱えていたことが、最も苦労した点であり、そこに結果を出せたことで、演劇人としても成長出来たと思っています。

今後の展望―2012年は7月に沖縄でのキジムナーフェスタ参加、9月に札幌にて新作発表、と東京以外での活動をメインに行います。その他、最新情報は「開幕ベナントレース facebook 公式ページ」(https://www.facebook.com/kanakura)にてチェックしてください。

協会に望むこと―この場を借りて、優秀賞に推して頂いた審査員の皆様、最終審査会で私に票を投じて頂いた審査員の皆様、そしてなにより観客賞を与えて頂いた観客の皆様にあらためて感謝の意を表したいと思います。いっそうの精進をして参ります。演出者としての自分により大きな刺激を与えて頂ける協会であることを強く望みます。



村井雄―06年に開幕ベナントレースを旗揚げ。以降、全作品の構成、脚本・演出を担当。09年初の海外公演『ROMEO and TOILET』をニューヨークにて敢行。The New York Times をはじめ各種メディアにおいて脚光を浴びる。エネルギーシユでシユルな世界観は意味の変容を喚起する。







### 若手演出家コンクール 公開審査

審査員は、鐘下辰男・木村繁・小林七緒・佐野バビ市・智春・土橋淳志・西沢栄治・松本祐子・御笠ノ忠次・村井健 流山児祥 11名が2票ずつの投票権を持つ。

### 講評 (審査委員の発言より抜粋)

#### ◇ 柏木俊彦 (第0章)

「あくびと風の威力(3600秒 ver.)」  
御笠ノ：すごく良かった。今だから言える言葉。四つ作品の中で一番、役者さんのことを最後まで覚えていられた。持ち帰れた作品。  
佐野：良さが残りました。惜むらくは前半に、つかみがない。前りが長い。演劇を自慢している人の視点。演劇に触れる機会のない人を基準にした場合、前半がもっとキッチリでない面白くない。

#### ◇ スズキ拓朗 (ダンス集団 dabo PUNK)

「さいあいシエイクスピア・レジー」  
鐘下：少女の造形が、重い設定のわりにステレオタイプに見える。自分自身子供の頃、大人の演じる小中学生を見て違和感を感じた。高校生の女の子は、こういう悩み方をするのか？  
小林：野菜の着ぐるみが好き。観たときに幸せになる。演劇には大事な事。シエイクスピアである必然性も無いようなので、むしろ子供向けのままでよかったのでは。野菜の中の唯一の人間の変化や、野菜たちのドラマが薄くなってしまった。野菜たちのキャラクターは非常に魅力的。

#### ◇ 村井雄 (開幕ペナントレース)

「アントンとチエーホフの桜の園」若手演出家コンクール2011バージョン」  
木村：祝祭劇を作ろうとしているのだから、祝祭には広場が必要だが舞台に隙間がなく、せつかくの奇抜な造形が大きな軌跡を描いて動けない。幕を取って動ける空間を作れなかったのは演出の最大の欠点だ。お祭りのような感覚は誰にもできるのではないので評価できる。整理し切れなかったのは劇場と核となる時間の無きもあるだろう。

#### ◇ 平塚直隆 (オイスター)

「日本語私辞典」  
木村：このころの平塚作品には観客を突っぱねて拍手を期待しないと言強が見える。迷子にならず一本通ってほしい。見終わっての不満は文字と言葉の関係性をどこまで考えているのか？ 文字と共に言葉が減る？ 最後はその葛藤を明確に提示していかないと気がする。他方、全編通して人間のニューモアとブラックにあふれている。言葉が減っても言葉を生み出している。暖かい作品だ。現在は人類始まって以来、メールと言電子文字を使ってコミュニケーションする時代になった。そんな時代の中で、言語を取り戻していかうという試みが見えた。  
智春：主人公が追いつめられていく様子ももっと丁寧な、たとえばだんだん狭くなることの恐怖などが描かれれば良かったが、そうではないので観ていて迷子になった。  
土橋：音が消える、というハードルの高い設定、筒井康隆の小説に似たものがあるが、小説の場合は最後に白紙。  
御笠ノ：最後がしょうもないオチだったら、おしっこ漏らしていたらどうかな。  
西沢：辞書の受け渡し方が上手くいってればこの作品はもっと違うところに行っていた。  
鐘下：僕は好きでした。あまりメッセージを意識しすぎてダメ。これは手触りがつかめない分、反対に豊かなものが見えてくる。芝居はメッセージだけじゃないから。

小林：作と演出が違うので演出だけの評価がしやすかった。いま、この話をやりたいという思いはなかった。でも、もっとうまく振付したらソクッと来た。みんなで踊るところが振付にしまさず、もっとうまく振付があったら、重たい話でも観終わって後からかたかた思っていたのではないか。  
流山児：演出が作家の側に寄り添っている。死者の言葉が震災後十年の「今」にどう響いているのか。圧倒的な死者の言葉に対して、性根が座っていないようにみえた。動きが「振り付け」に見えたら負けである。役者が「いま・ここ」に立っているという「根拠」を徹底的に探すべきである。演出の視線が優しすぎる。演出家は作家との批評の現場を持つべきだし、演出には常に「批評」の眼こそが必要、役者に対しても社会に対してもである。

村井：書けない作家ほど幽霊や異次元を出して逃げ込んでしまう傾向がある。そういうの嫌いだね。「死者を息で生きなさい」というメッセージも月並みにしか聞かれない。ある種の予定調和。セリフにも演技にもアリアリが感じられない。つまりは演出力、物足りなかつた。狭い空間でやることも制限時間あらかじめ分かってるんだから、それに合わせる工夫がなきゃ。  
松本：よくあるストーリーで、死者との小学生時代のエピソードも割とありがちな作品。唯オリジナリティを感じるには、作者が女性ならではの生産やセックスなどを連想させる台詞なのだが、演出がそこを拾ってこの作家ならではの息吹を活かして欲しい。また、演出の丁寧さが時として緩慢な流れを作っていて、物語世界に観客を連れ込んでいく勢いが感じられなかった。

松本：意味のない世界観を削り上げるという意味で、私の演出の方向性とは全く別の作品なのでわからないから面白がれた。くだらないことをどこまでショーアップして観客を魅了するのかが、この劇に対する努力の時として過剰に無駄な肉体と大声を使った表現には、なぜか好感が持てる。ただ、常にフルボリュームで紡ぎだされる表現に後半は飽きてきてしまう。笑いを誘導する他の手段をもっと工夫して欲しい。  
木村：怖さがあるといい。大人も子供も劇場で泣き叫ぶ世界だった。つい覗き見したい感覚に襲われる。この演出家の客席に対するアタックやハプニング

若手演出家コンクール2010最優秀賞 受賞記念公演受賞者 金哲義(きむ ちより)さんインタビュー  
去年最優秀賞を取って、変わったことは？  
変わった事はなく、また変わる事を望んでもありませんでした。メダルを目指すのではなく、記録を目指して走っています。当然出会う方々も増えましたが、そういった意味では何かを創る限り、変化は創り始めた頃から絶え間なく繰り返されてたように思っています。

今回の作品の見どころ、苦労した点は何ですか？  
葛藤したのは、歴史の中で隠され続けてきた数万人の死者との対峙です。現時点で把握されている15000人の犠牲者の名前を一枚一枚記していく事は、まだ見ぬ自分の故郷と血との対話であり、今後の自分自身の姿勢を問われている毎日でした。少し昔の支那の姿を問われている足元にそれは埋められているという事を感じて頂ければと思います。今回の作品を伝えたいメッセージ  
子供の頃から見てきたこの国の発展の頂点の中で、今、この時代にたくさんの人々の故郷が奪われて失う出来事があった事に驚いてます。故郷を取り戻す権利は、奪う者以外には皆に堂々と存在する。働きの権利には歴史の犠牲と共に遊ばないとけない。実は、本番の時にたくさんのお客様の笑顔をみて、僕が改めて教えて頂いたメッセージでした。今後の歴史は？

この数年と変わらず海の向こうの故郷と作品で繋がりたいし、世界に散らばる同じ血と作品を共創したいです。来年は少し問題作となる作品を上演する  
グの手法は、今日の演劇界ではしばらく無かったことだ。ずっと引付けを起こしたまに泣いていた字がいたが、悪夢を見たのだろう。演劇はすべてわからなくていいんです。そのわからなさや恐怖が一生に残るのだ。  
小林：大汗大声、圧倒的な肉体の力で押しまくってくる。パワーズにはとても好きな芝居。ただ、ピークがオープンングで後からアレ？となっていくのが残念。演出の手数が少ない印象。役者個々の持つ力がすごい分、個人芸に頼りすぎかも。ラストシーンでも一度強烈な集団の技が見たかった。  
流山児：あんまりエンターテインメントの方向に向かうとヤバイとおもった。ショーアップされた照明・音響など不要。パフォーマンスや演劇なんてジャン

ので、何かは閉ざされて何かは広がるとは思いますが、此処に居ながらでも作品の土壌は此処から離れるのか、それともやはり此処を土壌に作品が生きているのか、最近では歩歩めば未知の次なので、これからも不思議な混沌を楽しみながら目の前に身を任せるのでしよう。  
最後に一言お願いします。  
マダン劇でお客様と共に「遊ぶ」というのは、この国の小劇場界ではまだまだ浸透も定着も難しい事は毎回痛感しています。アラアルトとコンクリートと鉄骨と社会は、なかなか「氣」を共にしてはくれないけれども、ここに生きる限り、それでもこの大地と遊べなければ人は救われぬままに思っています。だから、苦手と感ずる人が多かろうとも、マダンを広げたいと思います。また色んな形で色んな場所に現れます。そんな時は遊んで頂ければ幸いです。本当にありがとうございます。

Unit 航路一ハンロー  
マダン劇 『蛇の島』  
『古俗に遠吠える狗たち』  
作・演出/金哲義  
2012年  
3月16日(金) ~ 18日(日)  
下北沢「劇」小劇場

金哲義(きむ ちより)  
1971年大阪生まれ。  
1993年「劇団メイ」結成。  
2002年「May」と改名、結成以来殆どの作品を作・演。近年は己のルーツを前面に打ち出し好評を得る。



第一次投票	柏木	スズキ	平塚	村井
鐘下辰男	○	○	○	○
木村繁	○	○	○	○
小林七緒	○	○	○	○
佐野バビ市	○	○	○	○
智春	○	○	○	○
土橋淳志	○	○	○	○
西沢栄治	○	○	○	○
松本祐子	○	○	○	○
御笠ノ忠次	○	○	○	○
村井健	○	○	○	○
流山児祥	○	○	○	○

一票差で平塚と村井が通過。余りの僅差に審査員一部から再度議論すべきではという声も聞かれたが、ルールはルールであるという委員長決定で進行した。上位二名による決選投票では、6対5とこれも一票差を制し、平塚直隆が最優秀賞に決定した。  
4作全てを観劇した観客からの投票による観客賞は、村井雄が受賞した。



今この時も被災の「場所」で闘い続ける方々、そして舞台芸術を創造する仲間達に対して、何が出来るのか？  
今回再び笹塚ファクトリーさんの御厚意を得て、ちょうど1年後のその日に、この世界の未来をこれから担い、創造してゆく高校生たちと様々な想いを表現してもらった。

### 若者の声に耳をすます

和田喜夫・菅野直子

三月十一日の大震災による問題を風化させないために、また弱者の声が消されないために、今回は十代の高校生を中心とした若者の声を聴き、話し合う会を開催しました。

この世界で、この国で、これからどのように生きてゆくか、最も心が揺れ動く世代、この国のこれからを支えて欲しい世代の不安や考えを、政府や多くのマスメディアが取り上げることは、この一年を通して殆どない状態です。次の世代にどんな世界を手渡すことが出来るか、それは先行世代全員の課題です。

郡山のおさか開成高校の演劇部による『この青空は、ほんとの空ってことでもいいですか？』、相馬高校の『今伝えたいこと(仮)』は、いずれも原発事故による不安、いじめ、葛藤、現在の日本社会への訴え、人間関係の重要さを高校生自身が話しあって生み出した作品でした。

福島の高校生に呼応する形で参加してくれた東京の新宿高校の『ひたすら、国道6号線。』は、部長の高木優希さんがいわき市の被災地を目撃した証言とともに自分の存在を問い、告白し、葛藤する今を描いた作品でした。

三作品ともに、描き方は異なっていますが、演劇がこの世に存在する理由を強烈に示してくれた舞台でした。

また、福島と東京の高校生から寄せられた100文字のメッセージ、詩、散文のリーディング公演は、都内の十三校の高校生十三人の参加と日大の大学院生の森陽平さん、高校演劇部コーチの岡崎恵介さんの協力によって実現しました。寄せられたメッセージの中には、「被災地の物、動物など人間以外の存在から震災について語る」という大胆な発想をもとに書かれた言葉、問いかけも折り込まれ、祈りと共に読み上げられました。

三校の出演者と100文字リーディングの出演者を交えての大交流会では、一人一人が今の想いを真剣に語ってくれ、時間いっぱいそれぞれの想いに耳をすます時間を持ちました。

気軽な快適さを求める現代社会に強烈な一石を投じる高校生の行動に、満場の客席からの強い応答もあり、このような場を継続しなければと思っています。

# フェニックス・プロジェクト Vol.4

## 3.11 から未来へ「福島、東京の高校生からのメッセージ」

### フェニックス・プロジェクト Vol.4 概要

- 3月10日(土)  
15:00-18:00  
A「今伝えたいこと」  
相馬高校(相馬市)  
C「ひたすら、国道6号線。」  
新宿高校(東京都)  
B「この青空は、ほんとの空ってこと  
でもいいですか？」  
あさか開成高校(郡山市)  
18:00-19:00  
高校生大交流会!  
司会=宮田慶子(演出家)  
参加=和田喜夫(演出家)  
スコット・ランキン  
(劇作家、オーストラリア)
- 3月11日(日)  
12:00-13:30  
高校2作品上演(福島)  
B「この青空は、  
ほんとの空ってことでもいいですか？」  
あさか開成高校(郡山市)  
A「今伝えたいこと」  
相馬高校(相馬市)  
14:00-15:00  
3.11リーディング企画  
3.11から未来へ  
高校生、100文字のメッセージ  
全国の高校生から集められた3.11を  
めぐる「100文字のメッセージ」。  
15:30-16:30  
高校1作品上演(東京)  
C「ひたすら、国道6号線。」  
新宿高校(東京都)  
17:30-19:30  
日豪の演劇人によるディスカッション  
「演劇は核実験や原発政策とどう向き  
合うのか」

自分たちには演劇がある。それが確信となった時、止まっていた時計が動き出し、演劇の力を信じ生徒たちにはエチュードを重ね、思いを吐き出し、または思いに気づく。「ばかやろー!」で始まったそれは生き抜く決意へと昇華し、内的生命力の存在を彼らに伝える。そしてそれは一つの作品となり、彼らの背中を力強く押し起している。

この度は貴重な機会を与えていただき、本当に感謝しております。福島中央テレビさんに特集を組んでいただき、放送後に反響があったと聞きました。また、4月15日の「イメーজ福島」という映画のイベントでの再演も決定しました。「今伝えたいこと(仮)」が「今伝えたいこと」になりつつあります。今回のイベントを通じて、大人が高校生であると感じたのが一番の収穫でした。

(相馬高校教諭 渡部義弘)

「私達がいる高校演劇界は閉鎖的です。お客様は他校演劇部か親御さんである事が多いですが、その中でも外へ発信したいと思う人間、するべき作品は存在すると生意気ながら感じています。僕も発信したいと願う人間でした。そんな僕に今回のような貴重な発表の場を頂き、本当にありがとうございます。高橋演劇人としては今回のような企画が続いて欲しいと切実に思っています。……皆様どうでしょうか？」

(新宿高校学生 高木優希)

100文字のメッセージをリーディング  
全国の高校生から集められた3.11をめぐる100文字のメッセージを、東京の高校演劇部員たちが、震災の14時46分に合わせ読み上げた。参加高校は都立戸山高校・駒込高校・世田谷総合高校・東京農大一高・開成高校。都立足立立高校ほか。演出：都立世田谷総合高校。



撮影=原節子

# 第2回日韓演劇フェスティバル

報告

## 日韓演劇フェスティバルを終えて 和田喜夫

第2回日韓演劇フェスティバルは、協会では初めての3都市での開催という大事業でした。経済的リスクを危惧する意見もありましたが、2009年の東京開催で学んだ事を支えに、当初の願いに複数地での開催を敢行しました。なぜこのフェスティバルを行う必要があるのか、何を共有できるのか、それをもう一度しっかりと話し合うこともこのフェスティバルの大きな課題であり、企画の一つだと考えました。まず、事前に日本側の実行委員、出演者、スタッフの間での事務作業を含めた多くの話し合いを行いました。

3都市の実行委員が共有意識を持つために、大阪に集まり、顔会わせと話し合いの場も持ちました。それでも、日々予想を超えた話し合いが必要となり、初めての開催の大阪と福岡では最終日まで大変な作業の連続だったようです。

韓国の演劇、在日の演劇、日韓の歴史的な関係と問題、在日の歴史と現状などへの関心の温度差も大きくありました。しかし、反省点も多くありますが、中堅や若手が実行委員に多く入ったことで新たな企画と出会いが実現し、また「回目」ということで韓国の演劇人との身近な会合も実現し、多くの話題となった舞台が生まれたことは、今回の新たな、大きな成果だと強く感じています。

特筆したいことは、公演の企画推進に多くの劇団の絶大な協力が有ったこと、在日の演劇人が身を粉にして活躍して下さったことです。また、のべ7千人以上の方が来場して下さい、一緒に広場「マダン」を生み出して下さったことには感謝の思いで一杯です。

4月16日から開催されたソウル演劇祭において、ソウル演劇協会、韓国演劇演出家協会、韓国小劇場協会と更なる交流のための覚書を交換できたことも、ご報告いたします。

## 東京



撮影＝V-WAVE  
(成毛章浩・香月可織)



## 「第2回日韓演劇フェスティバル」東京 報告者 洪明花

2009年の第一回目にお手伝いとして参加し、韓国の演劇人の持つエネルギーや身体性に触れ、私の出自とは関係なく、いち演劇人として、韓国演劇に大きな興味を抱きました。それは誇りであると同時にショックでもありました。在日の私ですら良くも悪くも、誤解していた韓国、誤解していた日本があったからです。韓国では「平台」のことを「二重(平台の日本での旧呼称)」と言ったり、「上手・下手」はそのまま通じたりと、稽古や仕込み中も日本語を耳にします。そしてなにより、芝居の中で「日本」という言葉が出てこない作品はほとんどありませんでした。

これほど入り込んで意識し合っている関係性には、もちろん悲しい歴史も「因」ですが、それだけではないと思います。韓国人の心としてよく耳にする「恨(ハン)」。これは、決して「恨み」ではなく、それを乗り越える粘り強さまでを意味します。このバイタリティや底抜けの明るさこそが今の韓国演劇の魅力ではないでしょうか。これは、私自身が在日や韓国人だからということとは関係なく、純粹に演劇人として韓国に興味を持ったからこそ、感じることであったのだと思います。

韓国戯曲『トナムコルへようこそ』や、『荷(チム)』、また韓国現代戯曲ドラマリーディングでは、日本の演出家や関わった俳優達が、韓国という国の持つ歴史や民族性を模索し、全身で感じる努力をしました。両作品とも原作者が来日、観劇しました。『トナムコル』の作家チャンジンは、映画化された自分の作品よりも面白かった、今後、韓国で上演をしたい、とまでの感激ぶりでした。また、日本の戯曲『奇妙旅行』では、韓国の演劇人たちが日本人の情緒の理解に努め、加害者と被害者の持つ葛藤を、日韓の関係性の中、稽古場で葛藤しながら、見事に描きました。作品の生まれ故郷である日本でも上演できたことを大変喜び、今後とも更に多くの日本の戯曲に触れたいと言っていました。日韓の俳優が共演する『異郷の涙』では、両国の俳優が持つ感受性や表現方法を、創作作業を通じて体感しあいました。

「おいでよ、マダン!!」では、韓国民族衣装の体験や、日韓落語、韓国を描いた日本の古典芸能「新内」、日韓の伝統遊びなど、普段なかなか見ることのできないラインナップで、日常の中に文化、演劇があるのだとあらためて感じました。「韓国現代劇の魅力」や「日韓演劇交流史」、「在日史」、また、アジア最大の劇場街「大法院」の紹介シリーズでは、現代の私達が立っている土台を再認識し、これからの可能性に大きな刺激となりました。「ちゃんそり」や「在日ってなにやねん!?」では、「在日」と言ってもひとくくりではなく、人間として、表現者として、それぞれの個性があることをさらけ出したのではないのでしょうか。また、「自分に魅力がある」としたら、それは在日ということかもしれない」と言ったマルセ太郎の、「回顧展ゲスト1」や、日本を代表する舞姫から世紀の舞姫と呼ばれるようになった崔春喜の写真展など、多くの方々の協力を得てフェスティバルを開催することができたこと感謝しています。反省点や乗り越えなければいけない問題点も多々ありますが、やはり「出会い」だとあらためて感じました。「出会い」の向こう側は人それぞれではあるけれど、まさに「出会い」こそが「考える」の始まりではないかと思えます。



## 第2回日韓演劇フェスティバル

●東京 1月17日〜30日、2月24日〜3月4日 於：あづますぽっと、プレイトの芝居小屋

### 演劇公演

劇団サンズ『奇妙旅行』作：古城十忍 演出：リュ・ジュン

劇団太陽族『異郷の涙』作：演出：岩崎正裕

フェスティバルメイ『作品』ト・マッコルへようこそ』作：チャン・ジン 訳：洪明花 演出：東憲司  
東京演劇アンサンブル『荷』作：ジョン・ボックン 訳：石川樹里 演出：坂手洋一

### ドラマリーディング

『道の上の家族』作：チャン・ソンヒ 訳：石川樹里 演出：須藤真実

『呉將軍の足の爪』作：パク・ジョヨル 訳：石川樹里 演出：中野志朗

『こんな歌』作：ジョン・ボックン 訳：石川樹里 演出：夏井孝裕

『ちゃんぽん』作：ユン・ジョンファン 訳：津川泉 演出：広田豹

### ホワイエ企画

おいでよ、マダン!!『日韓文化祭』  
ちゃんぽん!『在日ってどないやねん!』

韓国現代劇の魅力〜日韓演劇交流センターの活動から

アジア最大の劇場街・大学路 ①韓国の演劇事情 ②韓国演劇留学もやま話  
マルセ太郎回顧展ゲストーク

●展示 日韓演劇交流史／日韓史／在日史 マルセ太郎回顧展 崔承喜展

詩の展示 ぱくきよんみ、中村純

ポジャギ展示

### 大阪 2月3日〜19日 於：二心シアター倶楽 ドーンセンター

#### 演劇公演

日韓共同制作『小町風伝』作：太田省吾 演出：李潤澤

フェスティバルメイ『作品』ト・マッコルへようこそ』作：チャン・ジン 訳：洪明花 演出：東憲司  
劇団太陽族『異郷の涙』作：演出：岩崎正裕

劇団タルオルム『ノリハルラン合同競演』

劇団タルオルム『チョゴリの地』作：演出：金民樹

劇団ルベルハルラン『4月の儀式』ホンミョ|虚の幕』脚色：キン・キョロン 演出：ユン・ミラン

劇団MAY『風の市』『チャン』作：演出：金哲義

#### 韓国文学リーディング

朗読劇団 朗読GEN『秘密の花園』原作：金倫永 上演台本・構成：演出：秋山太加

泉南マダン『詩人 尹東柱を詩う』―「日帝残虐清算」をあらためて― 構成・演出：石井宏

●展示 日韓演劇交流史／日韓史／在日史

### 福岡 2月11日〜19日 於：大博多ホール、北九州芸術劇場、福岡市立青年センター ほか

#### 演劇公演

フェスティバルメイ『作品』ト・マッコルへようこそ』作：チャン・ジン 訳：洪明花 演出：東憲司  
劇団MAY『恋愛』作：劇団MAY 演出：ガク・ソンオ

日韓共同制作創作ミニシカル『春香伝』韓国版ロミオジュリエット』原作：春香伝 演出：山田理恵香

劇団太陽族『異郷の涙』作：演出：岩崎正裕

#### 韓国戯曲リーディング

劇団アントンクルー『旅路』作：ユン・ジョンソン 訳：津川泉 演出：安永史朗

非売線系ヒナス0.917』作：イ・レナ 訳：ジョン・テノン 演出：木村佳南子

●展示 日韓演劇交流史／日韓史／在日史

詩の展示 ぱくきよんみ

●日韓講座 春香伝・韓国講座

主催 日本演出者協会、韓国演劇演出家協会、ソウル演劇協会

あづますぽっと(公益財団法人としま未来文化財団)(東京)、豊島区(東京)

共催 11ドーン運営共同体(大阪) 助成 11平成23年度国際芸術交流支援事業(国際共同制作公演)

## 大阪



### 日韓演劇フェスティバルin大阪 「母と子、日韓の歴史の間で」大阪マダン 報告者 堀江ひろゆき

在日の問題を関西の独自性とした課題に、劇団タルオルムとMAYがそのエネルギーな舞台でこたえてくれた。九州島出身者の多い在日の人々にとって韓国との歴史としての四三事件は避け通れない、いまだに続く問題であるが、その暗い側面を明るく、家族の絆を通して描いた『風の市』、作演出の金哲義の自伝的な作品『チャンソン』は朝鮮学校の高校生成長過程で民族の誇りを追求した、金哲義の叫びを感じさせる秀逸な舞台であった。「劇団タルオルム」の金民樹が民族衣装であるチョゴリにかけた思いをぶつけた『チョゴリの地』は、韓国の歴史の中で現在の在日として生きていく決意を表して、私たちに迫ってくる舞台になっていた。九州島のマダン劇団「ノリベ・ハルラン」との二部構成の舞台は、両劇団の絆を感じさせるアンサンブルに好感が持てた。九州島で数万人の人々が虐殺された四三事件を描きながら、マダン劇特有の明るさで観客を巻き込んで行く彼らのエネルギーに引き込まれていた。MAYとタルオルムの参加の意義は今回の演劇フェスの特徴であり、関西での成功の原動力になったと言える。

今回の関西ブロックの取組みのメインである『小町風伝』は734名の観客動員から制作的にも演劇フェスを支える結果になった。李潤澤と関西在住の19名の役者とのコラボレーションは幾多の壁を乗り越えて、新しい可能性を見出した取り組みとして大きな成果と言える。太田省吾の時間を超越した無言劇を饒舌でエネルギーな祝祭劇にした李潤澤の演出は、既に古典としての存在であった『小町風伝』の新しい可能性を示唆してくれた点で今回の日韓演劇交流の将来にとって大きな財産となった取組みであった。今回の演劇フェス全体を通して、関西初進出の東憲司演出の『ト・マッコルへようこそ』はわずかに一回公演であったが感動を与えてくれた。岩崎正裕の『異郷の涙』は彼の新天地となる優れた舞台を提供してくれた。今回の隠れた存在として朗読劇団GENの『秘密の花園』は脚色に苦勞の甲斐あって満席の客席を魅了してくれた。かつての文化祭のような『泉南マダン』の舞台は素人臭い意味でかえって新鮮で好感度の印象を与えてくれた。三千名近い動員を得た今回の取組みは関西の財産になると思う。



日韓演劇フェスティバルin福岡について「演劇の言葉」  
報告者 山田恵理香

ある日、通訳者が不在で行われた「韓国舞踊ワークショップ」の時間がありました。それは、スタッフ同士ちょっとした行き違いから起きたセッティングミスでした。既に数日は通訳者を介してのワークショップが行われていたのに、突然の通訳者の不在に参加者も講師も現場スタッフも戸惑い、騒然となりました。それまでのコミュニケーションが通訳者を頼り切って行われていたのに、どのように進めれば良いのか分からなくなり場が止まってしまいました。言葉を見失ったのです。

双方がその表情や声色も含めて言葉を探し始めました。言葉をつづける為に動き始めました。もの凄いエネルギーを使って、ボディランゲージや片言の日本語や片言の韓国語という言葉がみづかり始めました。そして通訳者を必要としなくなる頃には、そこに演劇の言葉が存在して見えました。踊ることや演じることが参加者と韓国人講師との共通言語を見つけ出すことになっていったのです。その日以降の日本人参加者と韓国人講師とのコミュニケーションは大きくその様相をかえました。通訳者がいても、彼らの言葉で話し創作するようになっていきました。そこには多くの「私とあなた」が向き合う場ができていたのです。

ある日、「日韓演劇交流展示」の中から数枚の写真が消えました。「みている人を悲しい気持ちにさせる写真がある」という理由です。私たちは憤りました。どこに向けるべきなのか分からない怒りに震えました。私たちは日韓の歴史と日韓演劇交流史が切り離せないことを説明しました。フェスは既に始まっていますし、展示している会場はその後公演を行う会場の一つだったので利用中止などの大きな問題に発展しないようにすることが精一杯でした。悲しい気持ちにさせる写真の理由として、「演劇と戦争は関係がないか？」という言葉聞いた時には、「演劇と戦争とは関係がないのだ」と演劇が世界とどう関わっているのかについて話しました。それでも数枚の写真が外されました。私たちは、別会場でも展示を行い、そこで全ての写真を展示することで問題を回避しました。私たちは無力感に苛まれました。私たちは言葉を探しました。日本語で話しているにも関わらず、日本人同士で理解しあうことが困難だったのです。予想以上の日韓演劇交流を福岡で行うことの難しさを知りました。フェスの演劇作品たちが通訳者となってくれることを願いました。

私たちは、このフェスティバルを通して「演劇の言葉の強さと弱さ」を再確認することとなりました。私は閉会式で、このフェスティバルがいかに少ないスタッフで運営されたかを話しました。そして、演劇だから話せることがあるのだと話しました。そして、隣の国と演劇を通して話したいのならば、次はもっと多くの協力者が必要だと話しました。

# 日韓演劇フェスティバル

## 福岡



撮影=くうきプロジェクト 安部豪↓→



撮影：日韓演劇フェスティバル実行委員

# ポーランド特集

シンポジウムとワークショップ  
(報告||佐々木治巳)

ポーランドの前衛集団テアトル・シネマの初来日&初紹介ともなるポーランド特集では、シンポジウム「身体性の喪失」(東京、兵庫)、ワークショップ(兵庫)が行われた。20世紀前衛演劇の故郷ともいわれるポーランドでは、世界演劇に今もなお影響を与え続けているグロトフスキ、カントール亡き後、様々な劇団が生まれってきました。2009年に協会で招聘した劇団ガルジュニツツェや、今回招聘したテアトル・シネマは、現在のポーランド前衛演劇の注目される劇団として、ポーランド内外問わず話題にされています。

ソビエト崩壊以降、政治、経済、そして一人一人のライフスタイルも劇的に変動するポーランドでは、それぞれの目的、思想も大きく変わってきたと言えるでしょう。ワークショップでは、この劇的変動の中で埋もれる記憶を動きや言葉により呼び起こし、物語を刻印するように舞台が展開されました。彼らの活動は一目見て分かるというものではありませんが、一目見たときに想起される千々に乱れたものを感じる、このような体験が演劇の体験であることを提示します。

また、シンポジウム「身体性の喪失」では、行為が内包する存在の目的性、いかなれば、「何

2011年11月12日(東京)、11月20日(兵庫)シンポジウム「身体性の喪失」、11月16~19日(兵庫)ワークショップ

森下スタジオ(東京)、アイホール(兵庫)  
講師 スビクニフ・シムスキ、カタジナ・ロトキウヰツチ  
通訳 タテフシユ・アダム・オジエク(W.S.)  
久山宏一(シンポジウム)

担当 佐々木治巳

シンポジウムパネラー 清水信臣、高瀬久男(東京)、田中孝弥(兵庫)、大貫隆史(兵庫)

参加者 シンポジウム東京(計45人/男32・女13)、シンポジウム兵庫(計20人/男12・女8)、ワークショップ(計12人/男6・女6)

故、そこにいるのか。」ということが開示される。これが「身体性」と言われる中で、意識的、無意識的なそれぞれの社会が強制する訓練・規範によって、私たちは「身体性」を獲得していきません。ときに身体性はそれらの訓練・規範から抜け出すこと、抵抗することを表す語ともなりますが、今回のシンポジウムでは、身体性による演劇史的な格闘と、身体性以後の可能性／不可能性について語られました。身体性が「より良く生きる」という人間の存在形式の表象として示される一方、「より良く生きる」というヴィジョンの底が割れた状態から示される身体／人体をどのように考えるかという指摘は、無条件な前提とされている「より良く生きる」という否定しがたい願望／希望を不安に陥れます。この「不安な表現」を巡って議論が白熱しました。



## 国際演劇交流セミナー2011 報告

# 中国特集

演出家×俳優のチームで挑む、  
イプセン『人形の家』  
(報告||篠本賢一)

今回のセミナーは、中国演劇事情に詳しい関西プロダクションの坂手日登美氏の発案で、中国国家話劇院に所属し、世界で活躍する演出家の呉曉江氏を招聘し行われました。呉氏は、近年、イプセンの『人形の家』、『人民の敵』、『ヘッダ・ガブラー』などを演出し、中国の伝統に基礎を置きながら、人間性溢れる高い芸術性と実験性を兼ね備えた作品で観客を魅了してきました。そこで今回のセミナーの課題として「翻案」とは何か、という問いを掲げ、『人形の家』を題材にワークショップを行いました。ワークショップの特徴として、演出者と俳優がグループで参加する形をとり、参加前に各グループでシーンを練習しておき、呉氏にはそれに対してアドバイスをもろう、ということが試みられました。東京、大阪各地域で、少数ながら積極的に参加したグループが、数日の間に呉氏のアドバイスを基にして、演劇性を深めていったことは、参加者のみならず、それを観ている見学者にも大きな刺激だったように思います。呉氏のアドバイスは、様式性にこだわった演出に対しても、ドラマの内面性にこだわった演出に対しても、非常に的確なアドバイスを与えていました。また、俳優に対するアドバイスも俳優の技術力に応じた柔軟なものでしたが、それは呉氏が優れた俳優であるこ

2011年12月8~11日(大阪)、12月15~18日(東京)  
スタジオ315(大阪)、芸能花伝舎(東京)

講師 呉曉江  
通訳 中山文、鄭有君(大阪)、梅尾亮子、王皓月(東京)

担当 坂手日登美、青柳敦子、長谷川直輝  
参加者 東京(計18人/男5・女13見学25)、大阪(計8人/男4・女4・見学27)

ともよるのでしょう。さまざまな呉氏のアドバイスに共通していたことは、表現が客席にどのように伝わっていくのか、見るものと見られるものとの緊密な関係性を求めるということでした。どのような演出であろうと、表現された出来事が観客の心の中で如何に積み重なっていくのかが問題で、あいまいな表現によるイメージの中断を許さない、極めて明快な手法を演出家に求めていたように思います。また、このセミナーを通じて、ワークショップの意義についても運営スタッフのなかで問題となりました。ワークショップは、過程を重視し発表にはあまり大きな成果を求める必要はないのか、あるいは、ワークショップの成果を発表という形で結果させるべきなのか、否かです。これは企画に応じてこれからも考え続けなければなりません。ワークショップの内容に関わる大切な問題であることが関係者に記憶されました。





## in 東海

鈴木泉三郎作『生きてゐる小平次』 演出 右来左往  
 三好十郎作『殺意』(ストリップシヨウ) 演出 宮谷達也  
 菊池寛作『藤十郎の恋』 演出 菊本健郎  
 谷崎潤一郎作『無明と愛染』 演出 丸地亜矢  
 山本三作『父おや』 演出 久保田明  
 三島由紀夫作『道成寺』 近代能楽集 演出 石狩真佐夫・西川好弥  
 2012年1月21日〜22日 愛知県芸術劇場小ホール

これまで2回、中津川演劇CAMPの関連事業として開催してきた近代戯曲セミナーを、初めて名古屋の地で行いました。7人の協会員が、6作品を研修、3ステージに分けて発表し、併せてシンポジウムも開催しました。今回は初の名古屋での開催、ということもあり、研修対象の作家・作品も特にテーマを設定せず、各演出者が興味をもてる作品を、自由なスタイルで(上演形式、ドラマリーディング形式、アダプテーションなど)研修、発表したのですが、その内容の多様さもあり、400人近い観客には、かなり好意的に受け取ってもらえました。少数ではありますが「いつもこういった自分たちの年代にも判り易いお芝居を観せてほしい」という年配の方達もいらっしゃいました。改めて創造する側と観客との接点について、考えさせられた次第です。研修した側の感想としては、普段なかなか触れることの少ない作家、作品との出会いに、触発された点も多く、この企画に参加してよかった、という意見がほとんどでした。ただ、発表に重点を置いた分、実行委員の中で、日本の近代戯曲について深く掘り下げた研究、討議が幾分不足した点、また観客も交えてのシンポジウムが、時間の制約や準備不足もあり、やや中途半端になってしまった点など、次回開催の課題として考慮すべき事も多くあったのも事実です。それを踏まえ、次回は、来年2月、作家、作品を絞り込み一般の参加者も交えてのワークショップ形式による、ドラマリーディング研修を考えています。(実行委員長・菊本健郎)



『殺意』



『生きてゐる小平次』

## in 札幌

岸田・鏡花を軸に近代戯曲を考える  
 講師 青井陽治、清水友陽、納谷真大、横尾寛  
 2012年3月4日・18日 シアターZOO

今年の札幌の近代戯曲研修セミナーは、札幌の2つのカンパニー(WATER 33・39、11☆)が泉鏡花『天守物語』と岸田國士『命を弄ぶ男ふたり』を上演するのに合わせて、公開稽古の見学、ディスカッション、観劇後のシンポジウムという内容で実施しました。

3月4日の公開稽古では、両作品に演出・出演者がどう向き合い、それぞれのチームが戯曲をどう読んだのかを意見交換。札幌で演劇創造に関わりながら近代戯曲と向き合う難しさ、どのように作品として立ち上げていけばいいのかをディスカッションしました。

3月18日の青井陽治さんを招いてのシンポジウムでは、両演出(清水友陽・納谷真大)から作品に向き合ってきたことや苦労した点、参加者からは4日の公開稽古と上演を観たうえでの感想や意見が述べられました。青井さんの泉鏡花、岸田國士を軸とした近代から現代の演劇・戯曲についてのお話は大変興味深く、近代戯曲について考えるということは、結局は我々が今立っている演劇のことを考えることなのだ改めて思われました。

札幌で近代戯曲と向きあうには、まずは作り手・俳優・観客に対して戯曲そのものへの興味を喚起することが必要と考えています。2003年から2010年まで続けさせていただいた演劇大学で時いてきた種が、今回の公演を含めたここ数年の様々な成果として表れていると感じています。近代から現代の優れた戯曲による芝居が札幌で作られ上演される機会が増えることを切に願います。(清水友陽)

## 日本の近代戯曲 研修セミナー



## in 東京

三好十郎作『おさの音』 演出 貝山武久 / 演出助手 小林拓生  
 三好十郎作『女体』 演出 深寅芥 / 演出助手 青井陽治  
 2012年3月13日・14日 下北沢「劇」小劇場

第六回目の開催となった日本の近代戯曲研修セミナーin東京は、3月13、14日の二日間、下北沢「劇」小劇場で行われました。

日本の近代戯曲研修セミナーは、5日〜7日の稽古／研修期間を経て、リーディング上演とシンポジウムを行ってきました。稽古／研修には、講師／演出から戯曲へのアプローチ、近代への問い掛けなどがなされ、上演の準備としての「稽古」ではなく、「研修」を目的とすることが目指されてきました。シンポジウムでは専門家、研究者をアドバイザーに迎え、戯曲の背景や、劇作家の考えなどを多角的にとらえ、理解をより深める契機になるよう心掛けてきました。

今回の課題戯曲は、三好十郎『おさの音』、『女体』の二本が選ばれ、シンポジウムでは、三好戯曲を演出した経験を持つ演出家たちが話し合うことで、三好十郎の現代性を中心に探っていくのではないかと提案されました。『おさの音』の講師／演出は、貝山武久氏が担当しました。学生時代から三好戯曲に取り組んでいた貝山氏からは、三好戯曲の上演史や、三好戯曲に通底するテーマ、人間の描き方などが話され、『おさの音』を中心にしながら、他の三好戯曲についての視点も展開され三好十郎の劇世界について考える研修となりました。

『女体』の講師／演出は、深寅芥氏が担当しました。ラジオドラマとして書かれた『女体』から、三好戯曲に現れてくる特徴的な女性像を中心に、近代日本に生きる人々の経験や感性を現代からの視点で意識的に持ちだしながら差異化し、表されていました。また、ラジオドラマ台本に取り組むことで言葉、音を重視しつつも、「見せる」ことも示し、三好戯曲の可能性を模索し展開しました。

シンポジウムでは、三好戯曲を演出した若手も多く参加し、三好十郎が一時代だけでなく、現代へも繋がる問題提起を行っていること中心に、思想面だけでなく、劇手法などなど、三好十郎戯曲を演出した演出家ならではの臨場感のある議論となりました。

(総合プロデューサー・佐々木治)



『おさの音』



『女体』



# 演劇大学 in こおりやま

(報告) 青木淑子 / 実行委員会代表

2011年11月3～6日

郡山市男女共同参画センター

「さんかくプラザ」

郡山市立橋地域公民館

講師 神田陽司・宮田慶子・野崎美子

流山児祥・青井陽治・藤井びん

鹿目由紀

「福島で演劇大学を！」と長年思い続けていた町聡子(郡山演劇研究所ほのお)と実行委員会を作り、全面協力を申し出てくれた郡山文化センターと実施に向けて話を進め始めたまさにその時、3月11日を迎えました。地震・津波・原発事故と、三重苦の「ふくしま」にあって、私たちの頭から「演劇大学」は一瞬吹っ飛びました。私たちの日常から「水」「電気」「ガス」が無くなるなど思いもよみませんでした。まして、この胸中に、吸い込んでほならない付着してはならない「モノ」が存在することになるなど、予想もしていませんでした。毎日、天気予報と共に、「本日はマイクローシールド」放送される放射線量。市内の文化会館はことごとく壊れ、もはや文化活動がこの福島で存在することなど許されないので……と思われた時に、フェニックス・プロジェクトが舞台芸術家を支援する事業を展開するという知らせを受け、6月7月8月と笹塚で何らかの形で私たちも関わらせていただき……俄然「やる気」スイッチが入りました。



災を免れた公民館や公共施設を借り、意気消沈して活動をストップしている演劇仲間と呼びかけ、夏の高校総合文化祭の構成劇で「ふくしまの若者の元氣」を演劇を通して全国に知らしめた高校演劇の生徒たちや……少しずつ増えていく参加者の名前を祈るような気持ちで待ち続けました。初日の「講談」「こどものためのワークショップ」「シニアのための芝居作り」4日連続の「豆芝居づくり」述べ100名を超える参加者は、改めて「表現する」ことの喜び、楽しさを体感しました。遠くは奈良、名古屋からも参加者があり、「演劇」の持つ人を結ぶ力に、心の底から笑顔になりました。ありがとうございます！

「なぜ今演劇?」「なぜ今郡山?」という声を背中に感じながら、それでも、和田理事長、事務局の皆さん、何よりも郡山文化センターの協力を得て、会場が押さえられ講師が決まり……着々と準備が進んでいきました。かろうじて被



# 演劇大学 in 千葉

(報告) 深寅芥

2011年12月1～4日

会場 八千代市生涯学習プラザ

講師 関美能留、青井陽治、貝山武久、西垣耕造

森田久、流山児祥、御笠ノ忠次

担当 深寅芥

企画制作 演劇大学 in 千葉実行委員会

日本演出者協会

後援 八千代市 八千代市教育委員会

八千代市生涯学習プラザ

八千代市、八千代市生涯学習プラザ後援の下、千葉県八千代市において、初めての演劇大学を開催しました。実行委員には千葉県に縁が深い、三条会・関美能留さん、八千代市出身の御笠ノ忠次さん、市原出身の森田久さんが集結し、半年間に及ぶミーティングを実施いたしました。

千葉県は他の都道府県と比較し、文化・芸術の振興が遅れています。例えば、関東圏の東京・埼玉・神奈川ではご存知のように都立・県立の劇場が設置され、芸術監督が在籍しています。しかし、千葉県は同じ立地条件であるにも関わらず、芸術監督が在籍する劇場等は設置されてはおりません。出身者としては、歯がゆい思いです。

一方、高校演劇は盛んです。これはうれしいことです。高校演劇全国大会において千葉県の高校は類まれなる実績を持っており、1955年から全58回開催(2012年迄)の内、実に34回の全国大会に出場して、全国的に注目を集めております。

そういった事からも、千葉県は演劇の土壌が全く存在しないというわけではなく、高校卒業後或いは社会人になってから、演劇と触れる機会・窓口が県内に存在していないという事を推測しております。

開催したクラスは、青井陽治さん担当の「翻

訳クラス」、森田久さん担当の「俳優クラス」、御笠ノ忠次さん担当の「指導者クラス」と実行委員参加の「シンポジウム」です。

参加者からの声では好意的な意見をいただき、市民・地域の皆様方は演劇に触れる機会を求めていらっしゃる事を感じた次第です。2012年8月に予定される2回目の演劇大学では、より多くの参加者を募る為、千葉県高校演劇の事務局をされていた高校演劇の顧問の先生にご協力を仰ぎ、地域の方々の要望をすくい上げ、実施してまいりたいと思っております。

演出家・俳優養成セミナー2011報告

## 演劇大学 in 旭川

(報告) 森ただひろ

今回の演劇大学は「演劇でいかに人は育つか?」をテーマに高校演劇出張ワークショップ(羊屋氏)、公開演劇ワークショップ「あなたの思いを伝える表現のレッスン」(鴻上氏)、市民公開講座「日本演劇史」(村井氏)、エチュードから創る豆芝居(青井氏、小林氏、御笠ノ氏)、シンポジウムを講師陣に森、永井が加わり行いました。

高校演劇WSではコミュニケーションの大切さを重点的に、言葉ではなくマイム・リアクションから作りだす心の台詞を描いて行く。また舞台上がれば誰一人として無駄な役者は居ないということも伝えました。

公開演劇WSは主に声の要素(大きさ、高さor低さ、リズム&テンポ、間の作り方、声質・声色・音質・音色)を伝え、今まで経験したことのない感情や感覚を得ることで、内面が豊かになり演者として表現の幅が広がることを伝えました。

日本演劇史は舞楽・散楽の流入から日本で起きた出来事と演劇事情を絡めて話し、特に川上音一郎の演劇観はとても興味深いものでした。

豆芝居は当初一冊の台本を基に、様々な演出家の発想を体感しようと考えたのですが、それを變更しエチュードから豆芝居を作るやり方に変更しました。各演出家は「自分をフラットにすることも役者の力量」「WSはやればやるほど人間どうしが近くになる」「人間性をつつかないと舞台は成り立たない。大人の経験値をどう芝居に繋げ

2012年2月22~26日

旭川大学 旭川市神楽公民館「木楽輪ホール」  
講師 青井陽治、鴻上尚史、羊屋白玉、村井健、小林七緒  
御笠ノ忠次

担当 山内亮史(旭川大学・女子短期大学部 学長)

森ただひろ(劇団「BREATH」代表、永井順子(旭川大学准教授)、菅野浩(元旭山動物園園長)、松ト音次郎(ステーションワークス代表)、高田学(劇作家、川谷孝司(川谷大道員代表)、豊島勉(劇団艶屋代表)、斉藤俊夫(斉藤デザイン工房代表)

ていくか「役者の挑戦を高める」等の意識を役者参加者に伝えました。

シンポジウムは今回の演劇大学のテーマ「演劇でいかに人は育つか?」について論じました。結論から言うと自己発見・開放、他者とのコミュニケーションを養う演劇空間は人を直接育てる要因にはならない。しかし、人が育っていく上で演劇はとても短く集約することが出来る。他に對する興味やイマジネーションなど様々な有機的な物事が役者の気持ちを高めて行くし、人間的にも向上して行くことは間違いない。また、人は呼吸(肌)をジャムすることで人生の「切っ掛け」になるのは確か。つまり演劇は啓発する位置にあり「生きる力」を与えてくれる場所であるという内容に。

今回の演劇大学 in 旭川は、当初からの想い、ダイナ文化を柱に創造して行きます。



演出家・俳優養成セミナー2011報告

## 演劇大学 in はつかいち

(報告) 越智良江

広島県廿日市市での演劇大学開催は今年で二回目でした。廿日市市にはコンスタントに稼働しているアマチュア劇団が一つもないような土地ですので、第一回目の開催では、とにかく「演劇は楽しい」を広く地元の人たちに知ってもらいたい、そんな思いでスタートしました。二年目を迎えた今年は、そこから少しだけステップアップし、初心者向けのクラスも残しつつ、広島島の演劇を発信できるような人を出していきたい、初めて演劇をやる方にも目標となるような人、クラスを開催していきたいと、「演出家育成クラス」を設けました。受講生五人で、三日間講師と二人三脚で俳優に演出をつけていく講座でした。駒となる俳優を集めるのは大変でしたが、それでも三日間演劇界の第一線で活躍されている講師の指導を間近に体験できる、ということ喜んで協力いただけました。受講生も

広島だけでなく、四国からも参加があり、モチベーションの高い演出家たちが講師からアドバイスを受け、これからの活動のヒントをしかりと持ち帰っていたようです。そして、俳優の育成クラスとして同じく三日間、講師から指導が受けられる「俳優育成クラス」も設けました。スケジュール的にも敷居が高いかと心配したクラスでしたが、昨年の受講生が多く参加し、もっと演劇の勉強がしたい、という人が多くいるこ

2012年3月2~4日

はつかいち文化ホールさくらびあ  
講師 宮田慶子、高都幸男・西垣耕造、松本祐子  
鐘下辰男、和田章夫、村井健

とも発見できました。この二つの講座は最終日にお客様を入れて、三日間の成果を公開する機会も設けました。未完成の作品、三日間のつたない作品では観に来てもらえないのではないかと不安も参加者にもあったようですが、アフタートークも加えることにより、演劇が作られる過程や、参加した人の感想を身近に聞くことができ、見に来られたお客さんにも演劇に興味を持っていただけただけようでした。この二つのクラスが開催できたことは、昨年から大きな進歩だと感じています。今後、ここから出てきた意欲ある人たちのサポートができれば嬉しい限りです。そして、地元にもこういった演劇の企画を開催していく団体ができ、地元の人たちが率先して演劇のプログラムを行っていきけるような繋がりができるよう計画していきたいと思っています。





# 演劇大学 in 盛岡

(報告 坂田裕一)

岩手では東日本大震災の傷はまだ深く、演劇活動の復興もまだ途上である。

平成22年度から3カ年連続開催でスタートした演劇大学 in 盛岡の2回目は、震災を意識し、特別企画としてシンポジウムを開催した。和田理事長、流山児祥、小林七緒の東京グループに岩手から新田満、こむろこうじ、私(坂田裕一)がそれぞれの立場から震災と演劇について語り合った。

被災ホールの復活計画が地元の演劇人の意見抜きで発表された話や、被災地での身勝手な慰問公演で現地が疲弊しているという話が発表され、被災と向き合う演劇の可能性などについて議論が深まった。参加者は約30名。

4日間通しのプログラムは小林さんのワークショップ。12名の参加者で最終日に上演した。昨年に引き続き人気だったのが壤晴彦さんの朗読ワークショップ。ほぼ20名の参加。同じく昨年に引き続き講師となった黒テントの齋藤晴彦さんのワークショップは小説や随筆などの非戯曲文学をそのままの文体で舞台化する「物語る演劇」の手法で行い12名が参加した。和田理事長はアポリジニーの戯曲リーディングを行った。

2012年3月17〜20日

いわてアートサポートセンター

講師 和田喜夫、流山児祥、齋藤晴彦、壤晴彦

小林七緒

実行委員会 坂田裕一(委員長)、新田満

こむろこうじ、澤田綾香(事務局)

稲邊弘康(事務局)、佐野晴香(事務局)

参加者は8名。流山児祥さんは「現代演劇の歴史について」熱く語った。参加者10名。

盛岡は文学の街でもあり、啄木賢治をはじめ、現代では盛岡在住の直木賞作家・高橋克彦など数多くの作家を輩出している。演劇好きの作家も少なくなく、演劇人も盛岡ゆかりの作家の朗読劇が好きで、今回の演劇大学も昨年に続き朗読色を濃くした。岩手の演劇人は、今、岩手在住の12名の文学者が震災支援で発行した小説集「12の贈物」の全作品朗読劇化に取り組んでいる。講義終了後は盛岡の演劇人馴染みの居酒屋で講師・受講者・実行委員が震災のこと、これからの地域演劇のことなど深夜まで語り明かした。



## 理事会報告

2011年10月8日(土) 11時

出席理事：10名

①現状報告

②演劇大学 in 福島の進捗状況

③演劇大学 in 千葉の進捗状況

④演劇 CAMP in 中津川

⑤2012年度事業計画 抱負について

⑥フェニックスプロジェクトの報告

⑦第2回日韓演劇フェスティバル進捗状況

2011年11月14日(月) 11時

出席理事：8名

①演劇大学郡山の進捗状況

②平成24年度事業の確認

③日韓演劇フェスティバルの東京、大阪、福岡の進捗状況

2011年12月10日(土) 11時

出席理事：8名

①日韓演劇フェスティバルの宣伝について

②演劇大学 in 千葉の終了報告

2011年12月29日(木) 11時

出席理事：14名

第2回日韓演劇フェスティバルの進捗状況

宣伝について

2012年2月21日(火) 11時

出席理事：7名

①演劇大学 in 旭川進捗状況

②演劇大学 in はつかいち進捗状況

③第2回日韓演劇フェスティバル 現状報告

④若手演出家コンクール2011の最終審査会について

⑤フェニックスプロジェクト vol.4の進捗状況

⑥日本の近代戯曲研修セミナー in 東京

(2) 進捗状況

⑦演劇大学 in 盛岡進捗状況

⑧2012年度在外研修員決定について

⑨日本の近代戯曲研修セミナー in 東海の

終了報告

## 日本演出者協会 協会の事業担当

2012年4月現在

【理事長】和田喜夫

【副理事長】宮田慶子、流山児祥

【理事】青井陽治、鶴山仁、大西一郎、菊川徳之助、木嶋茂雄、木村繁、鴻上尚史、小林七緒、坂手洋一、篠崎光正、篠本賢一、西沢栄治、西川信廣、深津篤史、ふじたあさや、松本祐子、山田恵理香、渡部ギユウ

(部名)部長 ◆担当理事 ◆部員

【事業部】小林七緒 ◆青井陽治、鶴山仁、菊川徳之助、木村繁、坂手洋一、篠崎光正、宮田慶子、流山児祥

◆(東京) 千葉哲也、外波山文明、林英樹、羊屋白

玉、松森望宏、(関西) 井之上淳、金子順子、木嶋茂

雄、田中孝弥、棚瀬美幸、椋平淳、森本景文、山口

浩章、芳川雅典、(東海) 鹿目由紀、菊本健郎、齊藤

敏明、竹内菊、はせひろいち、トリエユウスケ、(熊

本) 亀井純太郎、山南純平、(仙台) 渡部ギユウ、(札

幌) 清水友賢、(福岡) 山田恵理香

【国際部】篠本賢一 ◆青井陽治、鶴山仁、貝山武久、

坂手洋一、堀江ひろゆき、松本祐子、◆(東京) 家田淳

金田海鶴、黒川逸朗、小林拓生、佐々木治己、左藤

慶、中野志朗、長谷川直輝、林英樹、洪明花、前嶋

の、松森望宏、森井隆、(関西) 坂手日登美、全リ

ンダ、田中孝弥、棚瀬美幸、土橋淳志、(東海) 佐久

間広一郎、ほりみか、本島勲、(仙台) 伊藤みゆ

【広報部】篠崎光正 ◆菊川徳之助、篠本賢一、流山児

祥 ◆(東京) 秋葉舞滝子、今井夢視、大杉良、流山

功治朗、桑原秀一、鈴木美恵子、林未知、平尾麻衣子、

三谷麻里子、緑川憲仁、(関西) 木嶋茂雄、田中孝弥、

(東海) ほりみか、(新潟) 井上ほりりん、(京都) 松

宮信男、(福岡) 糸山裕子

【教育出版部】坂手洋一 ◆青井陽治、鴻上尚史、ふじ

たあさや、流山児祥 ◆(東京) 佐々木治己

【法務部】西川信廣 ◆鶴山仁、小林七緒

【地域交流部】流山児祥 ◆鴻上尚史、深津篤史、山田

恵理香、渡部ギユウ ◆(熊本) 村上精一、(東海) 水

野誠子、(仙台) なかじょうぶ

【観劇案内】東京 遠藤栄藏、(関西) 木嶋茂雄、(東

海) 金子康雄

【日韓演劇交流センター委員】小松香里、松本祐子

【監事】福田悦雄、(関西) 粟田尚右、今泉おさむ

【評議員】内山鶴、瓜生正美、貝山武久、栗山民也、

中村孝夫、福田善之

【事務局長】大西一郎 (副事務局長) 篠本賢一、齋藤

由夏 (事務局) (東京) 上田郁子、秋葉舞滝子、(関西)

木嶋茂雄、(東海) 金子康雄



# 各地域活動通信

## 秋田

秋田を拠点とする劇団「わらび座」は、近年、外部から人を招いての舞台づくりや『アトム』『おもひでぼろぼろ』といった話題作で知名度を高めている。

昨年、そのスタッフが中心となって秋田県民ミュージカル『白瀬中尉物語—南十字星のもとへ』（栗城宏演出）が制作された。公募の市民や県内の演劇関係者が参加した舞台は、今年2月の最終公演後も再演を求める声が続いている。

10月には、秋田市のシアター・ル・フォル（富橋信孝代表）が、若手の劇団はちのす（加藤正志団長）とともに渡辺源四郎商店との合同公演として『俺の屍を越えていけ』（畑澤聖悟作・演出）を上演した。秋田生まれの畑澤が、出身地の演劇人と始めて本格的にタッグを組んだ北東北劇団交流企画として、関係者の多くが注目する舞台となった。

秋田県南では、岩手と合同で毎年新たに結成されるシアター劇団のメンバーが、今年も『わか仕立て唄う狸御殿』（中野健演出）の制作に参加。10月から被災地の大船渡市を含む若手県を巡演した。

昨年30回目の公演を果たした能代ミュージカルは、2月に31作目の『紙谷仁蔵物語』（梅田敏雄演出）を上演。鹿角では20周年を迎えた「演劇を愛しむ会」（武藤廣子会長）が『あんばいよし助産院』（高木豊平作・演出）を上演した。

実績ある劇団が新たな試みに挑み続け、歴史を重ねた手作りの舞台が周年の区切りを迎える一方、若手演劇人の動きも盛んになりつつある。再来年の国民文化祭の開催を見据え、秋田の演劇に新しい流れが来てきた半年だった。

【高橋純／秋田県演劇団体連盟理事】

## 仙台

2011年秋口から、宮城県内各地で住民参加による創作舞台がいくつも発表された。団員が津波で行方不明になった気仙沼市本吉町の住民劇団「おのずがだ劇団MOO（もー）」が11月6日、第10回公演『乳の流れる川』を市はまなすホールで上演。その他にも七ヶ浜国際村で地元ミュージカルカンパニー「Zangorji」が「Go Ahead」、年明け2月には大川原えすこホールでAZ9ジュニア・アクターズ第19回公演『フレンズ』（作：石川裕人演出／渡部ギユウ）。塩竈市民ミュージカル「ゴメンナさいと言える時2011」（作：演出：丹野久美子）など、いずれも震災体験をもとにした内容。鎮魂、そして復興、再生への想いと変革への挑戦が叫ばれた。関わった仙台の舞台人も今以上に一念に、そして素朴ながらも濃密な作業となった。また3月には、和合亮一「詩の磔」「詩の黙礼」をもとにした遊戯空間主催「詩×劇つばやきと叫びin仙台」が仙台文学館で上演された。被災地の中と外

## 金沢

### 「地域」の演劇祭

石川県金沢市は、人口45万人弱で、兼六園、九谷焼、金箔、加賀宝生（能楽）が有名なかつての百万石の城下町です。金沢での演劇は、16年前に紡績工場を改装した（金沢市民芸術村）が出来たことにより、比較的多くの地域劇団が活躍を続けています。この施設は、24時間使用可能で、特に夜間時の活用が大きな成果を上げてきました。

演劇祭は2000年以来毎年続けて行われていますが、2011年10〜11月には「いしかわ演劇祭2011」が開催されました。今回は、「Create From Ambivalence（矛盾から創造せよ）—原っぱからの出発—」（大震災事故）後の世界で演劇が果たす役割とは」というタイトルで、2週間行われました。地元から4グループ、県外（北海道）から1グループの上演と、他に舞踏ワークショップ3日、シンポジウム「原発事故が演劇に突きつけているもの」を行いました。

この演劇祭は、へかなざわ演劇人協会が主催団体となり、半年にわたる交流討論、実務を積み重ねて創りあげてい

の俳優がコラボレートした斬新な企画であった。「あるくと」は文化庁芸術家派遣事業や復興支援教育事業などで子ども達へのワークショップ出席を継続中。他にも被災地応援活動を多数行っている。（詳しくは「あるくと」Hd <http://act.jp/>）

【渡部ギユウ】

## 三重

東日本大震災と「原発事故」は、演劇する私たちにその認識と表現について「誠実な創造性」を迫ったように思います。金沢の演劇人たちは引き続き、お互いの差異を意識し興味の焦点を絞り込みながら、年に1回の「演劇祭」を続けていきます。みなさまの参加を歓迎致します。

【岡井直道（劇団アングルス代表）／へかなざわ演劇人協会事務局員】

三重の演劇状況は、この2〜3年で急速に盛り上がりつつある。特に県庁所在地である津市は公共劇場である三重県文化会館と、民間劇場である津あけぼの座、この2つの劇場が連携しながら全国から話題の劇団の公演やワークショップなどを行うことで格段に催事数が増えた。

2011年11月には2つの劇場が主催となり、仙台・杜の都の演劇祭を参考に、津市内の飲食店を会場にリーディング公演「MIPAD2011」を開催。早々とチケットが完売し、今年も開催は決定。規模を倍に行う予定である。

2012年3月、津あけぼの座が2つめの劇場・津あけぼの座スクエアをオープンしたことで、津あけぼの座50席、津あけぼの座スクエア150席、三重県文化会館（小ホール）300席と、様々な演劇催事にフレキシブルに対応できるようになり、2012年度の3館での演劇公演催事・アウトリーチ事業はさらに増加している。

「街に劇場があり、演劇がある」といふこと、人口27万人の地方都市・津からの挑戦はまだ始まったばかり、是非多くの方に

お越し頂き、また公演を開催して頂ければと思います。

【油田晃（油田劇庫）／NPO法人パフォーミングアーツネットワークみえ代表理事】

## 鹿児島

### 鹿児島島の演劇事情と朗読について

当地では、我が劇団を除いては結成五十〜十年の劇団が活動している。劇団R風見鶏は三十八年目を迎えるが、三十七周年公演の後、芝居でのセリフ「ことば（音声）」を見直そうということで「朗読」に取り組んできた。約百七十回の朗読会を劇団の稽古場や学校などで開いてきた。朗読は、「読み手」が「聞き手」がいれば誰にでもできるものだが、内容を伝えたいというところはやさしいことではない。芝居ができれば朗読もできるといつわけにはいかない。ここに「ことば（音声）」の魅力があると思う。

文のリズムや具体的なイメージをつかむための、丁寧な作業が求められる。音声の魅力は、ことばの「回性」にある。二度と同じ声を出すことはできない。改めて「ことば」の「深さ」を知る。芝居のセリフの新しい発見になるのではなからうか。私たちの劇団が朗読に取り組んだ理由である。「声」の多様性を知るために古典（樋口一葉・芥川龍之介等）から教科書記載の童話や詩などを取り上げている。

この経験を舞台を作る力にしたい。全国でのこのような取り組みについて、ご教示いただければ幸いです。

【大重英之／劇団R風見鶏】

アンケート 広報部では協会員に次の二項目のアンケートを実施しました。  
 問①これからの俳優たちに特に勉強しておいて欲しいことは、どんなことですか？  
 問②自分専用の稽古場を持たずとして(すでに持っている人は実際の稽古場で)、いかに欲しい機能・アイテムはなんですか？  
 (2問合わせて1000字以内)

### 今泉おさむ

- ①最近の若い俳優がたは他の舞台を観ない。  
 ②どんな舞台でも、観て、自分なりの観劇批評を書きためること。  
 ③ある程度の広さ、簡単な照明設備(勿論、防音設備)  
 ④防音設備  
 ⑤防音設備  
 ⑥防音設備  
 ⑦防音設備  
 ⑧防音設備  
 ⑨防音設備  
 ⑩防音設備

### 篠本賢一

- ①1960年代、70年代に演劇が目指したものの  
 ②アトリエ公演が可能な照明設備

### 篠崎光正

- ①文学と芸術  
 ②身体表現の可能性を追求できる空間と、大道具を格納できる倉庫。

### 西田了

- ①もの言う術への認識が低下しているように思えます。言葉(セリフ)の分析力及び表現力の豊かさづくりが必要ですよ。  
 ②稽古場元モニター機能装置(多角面拡大録画モニター)があると演技のふりかえりに利便性が増すのですが。  
 ③物置(大道具、小道具、衣裳の保管用)

### 大杉良

- ①他人を演じるのに、他人の外見・中身をよくよく観察して欲しい。と同時に自分を知って欲しい。  
 ②防音・防振動機能。そして広さ・高さ。更に言えば、観心地の良い客席(そのまま公演したい)。

### 小川功治郎

- ①自分の足で立つて、しっかり生きる方法。私が言うのも何ですが……。  
 ②防音機能。近隣の方々に迷惑にならないようにしたいです。

### 黒澤世莉

- ①学び続け変化し続ける姿勢が欲しい。  
 ②ぜひ欲しいと探し続けて幾星霜、広さと高さがあれば贅沢は言いません、音が出せないとかくさいとか極寒とかでな

たりできるように、電灯にガードがついてると更によい。

### 三ツ矢雄一

- ①基本をキチンと学んで欲しい。コント風ではなく、演劇的演技を身につけて欲しい。  
 ②稽古場持つてます。音響器材を充実させたい。

### 緑川憲仁

- ①日本の歴史です。今、自分たちが生きている時代までどのような時間を経て今に至っているかを知ることが、表現者にとっても大事なことだと思います。  
 ②ガラス張りになっていて、いつでも誰もが見学できる風通しの良さ。

### 守輪咲良

- ①正統な演技の基礎をしっかりと身につけて欲しい。  
 ②高さのあるスペースに音響照明の機材がそろっていれば充分。

### 流山晃祥

- ①1960年代以降のアンゲラ・演劇革命が伝えた事。そのナマのコトバ。とりわけ、唐・寺山・鈴木・佐藤信といったアンゲラ四天王の正統なる歴史ではなく、傍流と呼ばれた例えば、金杉忠男、瓜生良介、内田栄、芥正彦氏といった先達の行った演劇革命を後世に如何に残し、伝えるか？いつの時代も所謂評論家の遺す演劇史ではなく集団の営為の時代との格闘史こそ伝えていくべきなのである。

- ②開かれた稽古場として常にマチに開けておくこと。老若男女の「避難所」として劇場も稽古場もあるべきモノ。とってもちっちゃいSpaceですが私たちのSpace早稲田はその為に演劇フェスティバルを去年から始めました。今年も7月からやります。是非来て下さい。SENDAI座や仙台の演劇人によるプロデュース作品も登場します。

## 新 会員紹介

(24年1月までの入会)

岡田敬弘(おかだ たかひろ)



▼株式会社劇団マエカブ 所属 主催、作、演出。1983年2月12日生まれAB型▼

高校の頃より演劇を始め役者として舞台に立つ。2006年より地元劇団にて作、演出を始める。そして2011年に「地方における演劇文化をもっと身近な存在にしたい」という想いで劇団を立ち上げ今に至る。劇団だけではなく他の芸術団体や民間企業と結びつく事により、演劇の市場の拡大を目指します。演出に関してまだまだ至らないことばかりですが、日本演出者協会に所属する事により、意識を高めよりよい作品を作り続けていきたいと考えています。皆さんよろしくお願ひします。▼株式会社劇団マエカブ <http://maekabu.main.jp/>▼

作、演出作品『呪われし崇徳天皇』『戦国の世を生きた男』『彗星の逆光の果てに』『SONOBA』『瀬戸内戦隊☆シオレンジャー』『グズの魔法使い』

河田園子(かわだ そのこ)



▼1996年より財団法人現代演劇協会に所属。2007年より演劇企画JOK

Oのメンバーとなる。2002年劇団昇『クリスマス・キャロル』で演出デビュー。以後『霧のむこうの不思議な町』『いち

「泥棒のうた」(イツフオーリーズ)『宿命』『誰』(昴サードステージ)『大地のカケラ』(劇団東演)『富沢賢治 宛名のない手紙』(文京シビックセンター)日生劇場ファミリーフェスティバル『チャイコフスキー』(脚本)『ビューティフルフジマヤ』(国民文化祭参加作品演出)『ゴルゴダメール』(劇団俳小)『エデンの東』(劇団昇)など。演劇学校や声優学校、各地ワークショップの講師など、未来の演劇人育成や各地の演劇人たちとの交流の場も広げている。

### 斎藤美明



▼高校よりトラン

ベットの始める。大 学では応援部吹奏 楽団に所属。マーチングのステージディレクターとして、企 画、構成、アレンジ、練習指導を行う。 また、ミュージカル学校にてダンスほか 学び、役者としても舞台上に立つ。その 後、2000年秋にtheCRAZY ANGEL COMPANYを旗揚げし、演出・代表を 務める。マーチングをベースに、ブラ ス・ダンス・リズム・芝居の融合を試み る新しい「音のパフォーマンズ」を開拓 theCRAZY ANGEL COMPANYの全作品 を演出のほか、外部団体へも演出協力を 行う。またイベント制作・進行や、舞台 監督としてもコンサート、ダンス、演劇 とジャンル問わず幅広く行っている。



## 部会だより

### 事業部

今年度後半も盛りだくさんでした。「演劇大学」は郡山・千葉・旭川・廿日市、盛岡の5か所。地域のニーズに合わせ、3年間で何を残せるかを今後も探していきます。「日韓フェス」は東京・大阪・福岡の三都市で開催、前回は上回る反響で多くの方に日韓の演劇に触れていただきました。「近代戯曲」はベテランと若手が一緒に勉強する場として定着してきました。「若手コンクール」最終審査は今年は大接戦で全て一票差という結果に。審査員も過去の最優秀受賞者が増えました。フュニクス・プロジェクトは福島と東京の高校生が作品を上演、また全国の高校生からのメッセージも読み上げられました。(小林七緒)

### 国際部

2011年度下半期、国際部では、ポランド特集、中国特集と二つのセミナーを開催しました。上半期のロシア特集、スイス特集を含め、年間を通して四つのセミナーというのは、過去の開催数に比べ多いとは言えませんが、その代わりに今年度はそれぞれの企画に対して、綿密な話し合いをもつことができました。部内で、年齢を経験を問わず、セミナーの社会的意義やそ

必要な要素を備えた俳優、必要な要素を備えた稽古場、なかなか全て叶うものではありませんが理想は持っているものです。俳優については、稽古が始まってからではもう勉強が間に合わないような日々の過ごし方ともいえる回答が多く見られました。演出者と俳優養成をするものは同一ではありませんが、皆さん似たような実感を多く持っているという印象でした。もう少し掘り下げていくとこれからの演出者にも役立つ情報をまとめられるかもしれないような質問でしたが、残念ながら今回は回答数が少なく15名でした。もっとアンケートに答えやすい環境を整えるべく努力してゆきたいと思います。  
ご協力いただきました会員の方々、ありがとうございました。(編集部)

の方法論について検討を重ねたことは、演出という仕事にも通じ、意味あることだったと思います。また先の部会では、部員がセミナーの運営に奔走するだけでなく、国際的視野をもって世界の演劇とどう向き合うか、その情報の収集と発信にも努力していこう、とあらためて確認されました。(篠本賢一)

### 広報部

広報部は協会誌「D」の発行を年5月1日、11月1日、2回行っています。協会のほか、全国の図書館や公共施設、その他関係所に配布しています。創刊から4年、日本全国で閲覧できるような体制を目指していますが、まだ65パーセントまでしか達成していません。ぜひ効率の良い配布先をご紹介ください。また、構想から3年かけてホームページを立ち上げましたが、そのホームページの閲覧状況も数値を伸ばしている状況ではありません。そのため、その活用方法をさらに協議して、良質なホームページを目指しています。このように半年間の広報部活動報告としては、この2点が中心の活動ですが、実はそれだけではありません。それ以外の広報活動こそ、協会には必要不可欠な作業ですが、無念ながらそこへ回す余力がありません。部員募集を行っていますので、ご報ください。(篠崎光広)

### 法務部

演出家の演出契約やロイヤリティーなどについて適正と思われる契約等がありましたら法務部へご連絡下さい。また、最近では団体で破産して契約した演出料が支払われないというケースが起っています。ご報告下さい。演劇に対する新しい支援制度、劇場法(仮称)、日本版アーツカウンシルの創設が動き始めました。その動向も注視していかなければと考えています。これらに関する情報や疑問点がありましたらご連絡下さい。よろしくお願いたします。(西川信廣)

### 地域交流部

恒例の10月の中津川CAMPを地域交流国際交流の大ミーティングにしよう!と画策しています。「日本の演出家大集合!」です。100人演劇人サミット、昼夜を徹して「日本演劇の未来!」について話しませんか? 温泉に入って飲んで歌ってケンカして(それはナン?か...)...演出家大会です。被災地3県というより東北ブロック創設に向けて具体的に動こうと思っています。鴻上くんも手伝ってね!(流山晃祥)

退会:浅井慶 寺島美希 長崎紀昭  
青柳敦子 宮島春彦

### 四宮貴久 (しのみや・あつひさ)



▼フリー。国立音楽大学卒業後渡米。AEA, SAG, AVAの米俳優協会に

所属。ミュージカルを中心に活動し、全米ツアー『王様と私』、スイス『ウェストサイド・ストーリー』、米地方公演ほか多数出演。日本では『ミス・サイゴン』『パレートのクイーン』等。近年は西日本を主に演出、振付、ワークショップなど行う。翻訳・演出・振付に『王様と私』(岡山)、『あなたは美しい人チャリ! ブラウン』(岐阜)他。今年2月には2010年NYMFで入賞したミュージカル『TRAILS』を翻訳プロデュースし、東京にてリーディング・コンサート版を上演。現在は各地にて指導と共に愛媛・坊っちゃん劇場『幕末ガール』に出演中。

### 高橋恵 (たかはし・めぐみ)



▼虚空旅団という劇団にて主宰・脚本・演出を担当しています。大阪を中心に、

年1〜2回オリジナル作品を上演しており、劇団以外の演劇活動としては、現在、伊丹想流私塾の師範を務めています。また、たまに劇場製作のプロデュース公演で脚本を担当したり、演出助手・制作補佐として公演に参加することがあります。最近の活動としては、2012年3月、大阪府立ドーンセンターにて第17回女性芸術劇場『光をあつめて』(演出:深津篤史)の脚本を担当しました。ます

ます風当たりがキツイ大阪の状況ではありますが、大概を持って小劇場での演劇活動を続けていきたいと思っています。

### 横田翔 (よこた・しょう)



▼所属 松竹芸能 劇団ほしとかげ主宰 ▼1988年広島にて生誕 ▼2007

年から法政大学多摩キャンパス図書館にて独学で演出について学ぶ。そして2012年の2月に、とにかく面白いもの、また、とにかく客席に臨場感を送る事をテーマに、劇団『ほしとかげ』を旗揚げ。現在、東京・下北沢にあるスタジオで毎月公演実施中。普段は松竹芸能の芸人として漫才、コントを中心に活動。僕は今、演出技法の無限の可能性に毎日メロメロです。これからもしっかり学んでいきたいので、どうぞ宜しくお願いします。▼過去 脚本・演出作品『眠れぬ夜ハ誰ノモノ?』▼演出作品『THEネアンデルタールズ』『ぶらいベーターいあんぐる』他▼僕らの公演は、演出者協会会員証をお持ちいただければいつでも無料で観覧出来ますので、是非遊びに来てください。▼http://hoshitake.com

# データで見るDの題材



2008.11	創刊号 「足場のない演劇」	戌井市郎×坂東玉三郎
2009.5	2号 「知的な作業のスリル」	市原悦子×宮田慶子
2009.11	3号 「劇場のある国へ」	野田秀樹×篠崎光正
2010.5	4号 「贅沢な仕事」	仲代達矢×鶴山仁
2010.11	5号 「劇場法、迫る！」	平田オリザ
2011.5	6号 「NHK 劇場中継の復活を！」	
	号外 東日本大震災 2011.3.11	
2011.11	7号 「演出家と劇場」	鴻上尚史×ペーター・ゲスナー



創刊から5年目を迎えるにあたって、この協会誌「D」の顔である対談リストを作成しました。第1号の戌井市郎氏がすでに他界されましたが、この対談は現在取り壊された歌舞伎座の貴賓室で行った貴重な記録となりました。協会誌は全国の図書館で閲覧できる態勢を目指していますが、バックナンバーご希望の方には、ホームページで閲覧できるように準備を進めています。また、協会のイベント会場で残部をご希望の方に差し上げますのでお越しく下さい。

(広報部長・篠崎光正)

## 編集後記

▼協会誌の編集を行っている、ひしひしと感じることがある。協会の活動は一言でいうと、「活発」であると。小規模な協会でこれだけの活動を展開することは、正直言って全力で突っ走っている列車のようなもの。ただ心配がひとつ。事業記録を充実しなければ、記録の整備が急務でしょう。(篠崎光正)

▼人を勇気づける言葉、人を傷つけてしまふ言葉、飛び交う様々な言葉たち。東日本大震災から一年経った今年の春は、言葉の意味を重く感じた春でした。(篠本賢一)

▼進行係を仰せつかりました。カレンダーを見たり作ったりすることは大好きなのですが自分の現場が入るとここのことがつい遠くに行ってしまうがちなのをなんとかしたいなと思っています。(三谷麻里子)

▼縁あって故郷の金沢に拠点を移すこととなりました。広報部金沢支部の発足です。支部長です。一人しかいませんが……(広報部員随時募集中)。各方面にはご迷惑おかけしますが、今後ともよろしくお願いたします。(小川功治朗)

▼協会事業が拡大・発展しているように感じます。HPもリニューアルされました。すばらしいことだと思います。なのに、編集部員が増えていません。部員増員も急務です。ぜひ入部してください！今愛媛で、満開の桜に囲まれています。広報部活動の開花はD発刊です。嬉しいものです。(大杉良)

▼日本全国の演出家・演出者さんたちから集まる言葉ひとつひとつの重みをかみしめながら、それらの言葉が膨大に集積していく「D」の存在感の大きさを実感しています。(緑川憲仁)